

国土審議会 計画推進部会第13回住み続けられる国土専門委員会

平成31年3月8日

【水谷課長補佐】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから国土審議会計画推進部会 住み続けられる国土専門委員会の第13回会議を開催させていただきます。

私は事務局を務めさせていただいております、国土政策局総合計画課の水谷でございます。本日はお忙しい中ご出席いただきまして、ありがとうございます。事務の関係でお伝えすることがございますので、その間しばらく司会を務めさせていただきます。

カメラ撮影が必要な方々におかれましては、この時間をお願いいたします。

会議の冒頭につきまして、申し述べさせていただきます。会議については公開することとされておりまして、本会議も一般の方々に傍聴いただいております。あらかじめご了承くださいますようよろしくお願いいたします。

本日、事前に広井委員と谷口委員より、所用によりご欠席のご連絡をいただいております。

なお、本専門委員会は原則としてペーパーレスでの会議を実施しております。このため、今回の資料については一部資料を除きまして、紙媒体での机上配付を行っておりません。皆様のペーパーレス化へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

続いて、前回からタブレットで行っておりまして、簡単にタブレットの操作方法についてご説明させていただきます。タブレット上に表示されております資料のアイコンをタッチしていただきますと、資料が表示されます。ページを前後する場合にはスマートフォンの操作と同様、指でスクロールしていただくと操作できます。また、複数ページを一度に一覧する場合とか、複数ページ飛ぶ場合には、指で画面をつまむような操作をしていただくと一覧になります。簡単ですが、以上でございます。ごらんになっている資料を閉じて他の資料に移りたい場合には、画面左上の矢印表示のアイコンをタッチしていただきますと、資料一覧に戻ります。なお、くれぐれも右上のバツ印にはタッチしないようお願いいたします。再度、IDとパスワードの入力が必要となります。

簡単ではございますが、タブレットの操作で不明な点がございましたらお知らせください。予備も用意しております。よろしくお願いいたします。

それでは、カメラ撮影はここまでとさせていただきます。

事務局から、議事に入る前の説明については以上でございます。これ以降の議事運営は委員長にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【小田切委員長】 了解いたしました。ありがとうございます。

まず、おはようございます。改めましてどうぞよろしくお願いいたします。後でご紹介させていただきますが、本日はゲストスピーカーに、大変著名なstudio-L代表の山崎さんにお越しいただいております。本日はありがとうございます。

【studio-L山崎代表】 よろしく申し上げます。

【小田切委員長】 それで、実は冒頭から皆様方にご相談ですが、山崎代表のご要望もありまして、議事の進め方について、少しお手元の次第と変えさせていただきたいと思っております。最初に山崎代表のお話をお聞きすることになっておりましたが、実は山崎代表、私どものとりまとめについても聞いた上でプレゼンテーションをされたいという、大変うれしいご希望がありました。ぜひそれを実現させていただきたいと思っております。ということで、まず2番を頭にしまして、その後ゲストスピーカーの山崎さんからのお話をいただくというふうにさせていただきたいと思っております。

なお、本日は今申し上げました2019年とりまとめ案と3カ年とりまとめ骨子案を両方議論させていただくこともございまして、通常より20分長い2時間20分という枠を設けさせていただいております。本委員会も残すところ、今回も含めて2回になりますので、ぜひ視察なども踏まえながら、全体のとりまとめについて濃密な議論をしていただければと思います。

それでは、まず2019年とりまとめ案を中心に、事務局から説明していただき、これはあれですか、3年間のとりまとめも一緒にさせていただいてよろしいでしょうか。その後、山崎さんからお話をいただくことにしたいと思います。

それでは、お願いします。

【小路企画専門官】 では、私から、前回の委員会におきまして、2019年とりまとめの骨子、あとはおおよその概要についてご説明した上でいただきました議論を踏まえまして、本日の資料をご用意してございます。

資料1-1の「2019年とりまとめ(案)」ということで、サブタイトルとして「新たなコミュニティの創造を通じた新しい内発的発展が支える地域づくり」とさせていただいております。

次のページの目次でございますが、前回とほぼ同様の構成としております。「新たなコミ

「コミュニティの創造」と「新しい内発的発展が支える地域づくり」という二本柱での構成でございます。

1のはじめにということで、1ページからでございますが、イントロということで、この委員会の背景、並びにこの3カ年目の取組の背景ということで、31行目の今年度につきましては、地域の定住者だけでなく、各地域に多様な関心を持ち多様に関わる人々との協働によるコミュニティの創造を通じた内発的な地域づくりの推進に向けた調査・検討を行うこととしておりました。

2ページ目からが現在の第二次国土形成計画における記述を引用させていただくとともに、4ページ目におきましては、これまで各省で取り組んできている小さな拠点・地域運営組織に関する議論のとりまとめ、ないし手引などについて整理させていただいております。

6ページに飛びまして、今年度の審議事項ということで、この3カ年の共通テーマといたしましては、都市と地方の対流による人口減少地域の課題解決に向けた方策の検討ということでの位置づけでございますが、7ページ目の上を書いてありますとおり、今年度におきましては、多層の対流を促進し、地域の定住者だけでなく対流によって何らかの関係を持つ人々との協働による内発的な地域づくりを推進する施策を検討するというところで、審議事項について二本柱を立てたということで、なぜこの2つを検討することにしたのかを下の図で簡単に整理しているところでございます。若者の流出や高齢化によって地域コミュニティの弱体化が顕在化している。それに対応するために地域内外の人々を巻き込みながら、人と人とのつながりを組み直すことを通じて新たなコミュニティを創造する。並びに外部人材の地域のかかわりを通じて、地域資源について新たな気づきを生み出すことにより新たな内発的発展を実現することによって、最終的な住み続けられる国土を実現することを目指すということで、このテーマについて議論してきたということでございます。

8ページ目からが、2章の新たなコミュニティの創造ということで、この委員会において対象とするコミュニティについては、8行目に記述しておりますとおり、内発的発展が支える地域づくりの基礎的要素の1つとしてコミュニティを位置づける。共通の価値観に基づくテーマコミュニティを中心に議論してきたところでございまして、(1)のコミュニティとはということで、コミュニティの整理ということで、本日ご欠席でございますけれども、広井先生の考え方の整理のもとに図2-1のピンクで示すとおり、地域コミュニティとテーマコミュニティという中の、テーマコミュニティを中心に議論してきたところ

でございます。コミュニティ形成の意義ということで、そもそも何のためにコミュニティを形成するのかというような位置づけについて、簡単に整理をさせていただいております。

次に10ページの(3)、コミュニティをめぐる構造でございます。コミュニティの本質として、閉じたような世界ではなくて、完全には閉じていなくて外ともつながっているというようなところ。これは広井先生も言及されておりますし、この委員会の中で藤山先生からも珊瑚礁と大洋の関係というところでの言及をいただいているところでございます。

(4)のコミュニティの変遷ということで、従来型の地縁型コミュニティだけではなくて、共通の価値観に基づいて多様な主体が連携して取り組むというようなコミュニティとか、さらに最近では、バーチャル空間におけるコミュニティ形成も見られるということ整理しております。

次に12ページ、2-2のコミュニティに関する今後の方向性ということで、(1)の新たなコミュニティの創造に向けた3つの要素につきましては、前回の議論をいろいろいただきました結果、そのときから若干資料が変わっている箇所となります。前回はコミュニティの創造においては、「場」、「機能」、「仕組み」というような言い方をしまして、この「機能」の考え方についていろいろご意見があったところでございます。そこで今回は、「人」、「場」、「仕組み」によって、コミュニティが創造される。それが相まって機能が発揮されて、その機能によって得られる交流を求めて人々がコミュニティを形成するというような考え方の整理をさせていただきます。

6行目にあるように、「人」というのはそこに集まってくる人全体も指しますけれども、人と人のつながりをサポートするような「人」というところに着目して、ここは記述しております。あと、「場」については、誰でも自由に入ってこられるような空間を持つということがコミュニティ形成に必要であること。最後の「仕組み」は、単に「場」があるのではなく、その場に人々が集まってくるようなさまざまな仕組み、その仕組みのあり方はさまざまでございますけれども、それが結果としてコミュニティ形成の可能性を高めるという、触媒のような機能を果たすようなところを「仕組み」と考えております。

13ページ目には、棚田を例としてどのようにこのコミュニティ形成が図られるかというような例示をさせていただくとともに、次のページの図2-7では、「人」、「場」、「仕組み」がそれぞれのコミュニティ形成によってどのような項目で集まってくるかということについて、具体例を用いた整理をさせていただいております。

次に、15ページの(2)段階的な新たなコミュニティの創造ということで、コミュニ

ティを形成させていくためには、段階を踏んで取り組んでいく必要があるということ。そのときには「場」となるようなコミュニティ創造拠点の形成、並びにその人々が集まってくるものをつなぐつながりサポート人材というような場が必要。そういうことをもって、人々がコミュニティを形成するハードルというか、コストというものを下げることによって、コミュニティを形成する可能性を高めていくというようなことが段階的なコミュニティの創造ではないかと整理しているところでございます。

次の16ページからが、3章の新しい内発的発展でございます。(1) 地域の内発的発展につきましては、小田切委員長の書物からエッセンスを考えさせていただきましたけれども、我々の委員会で新しい内発的発展についてこれまでも議論してまいりました。従来型と大きく異なるのは外部アクターにおける関与という中で、地域主導型の形もあれば、外部アクターが中心となるような役割を果たす内発的発展もあるのではないかとということで、具体例として後ろで、地域先導の事例としては西粟倉村の事例、並びに高知県の集落活動センターの例。また、外部アクターとの連携については、我々の委員会でも開催いたしました輪島市における「輪島カブール」の取組とか、去年7月の委員会でもプレゼンしていただきましたNext Commons Labの遠野市のような事例があるのではないかと整理させていただいております。

具体例の説明については全て省略させていただきます、次に25ページまでお願いいたします。3-2の新しい内発的発展に関する今後の方向性ということで、まず3つの観点から整理しております。

25ページの図3-6で整理してございますけれども、1つは定住人口や関係人口に内在する活動人口を拡大させていくという方向性、2つ目は時間の使い方・価値観の変化に着目する点、3つ目は行政と民間の役割分担という視点でございます。

次の26ページにおきましては、その活動人口はどのようなものを想定しているかということで表現しております。下の図3-7を見ていただきますと、現状の定住人口を中心とするような世界のままでいると、左のようにシュリンクしていく方向になってしまうと。そうではなくて、外とのつながり、それから関係人口ということで去年議論してきたものを含めて考えていくと、そういうものの中で対流を促進することによって、ひいては活動人口も増やしていくことができ、地域内、オレンジの中における人口が減少したとしても、全体としての活動を活発化させていくことが1つの方向性ではないかとございまして。

イ)の時間の使い方・価値観の変化への対応では、マルチステージ型の社会の変化とか、趣味・地域活動における時間と使い方というようなところの整理をさせていただきますとともに、29ページ以降では新しい働き方ということで、クラウドソーシングとか、29ページ下で、岩手県八幡平市の「起業志民プロジェクト」という例を取り上げさせていただきますけれども、ICT技術の修得による起業を支援するような活動について取り上げさせていただきますいております。

31ページ、ウ)の行政と民間の適切な役割分担につきましては、適切な役割分担という中の一例といたしましては、32ページにおける三重銀行の起業支援の取組とか、33ページの京都移住計画の取組について記述させていただきます。

34ページからは(2)内発的発展を支える地域のプロセスデザインということで、このあり方についてはこの委員会において議論してきたところでございます。プロセスデザインについては段階的に取り組んでいくということで、ページが飛びますけれども、36ページの図3-17で概念的に図を整理させていただいているところでございます。もうかなり議論してきた論点ですので、説明は省略いたしますけれども、要は段階を踏んでいくことによって活動人口や関係人口を増やしていくというステップを踏む上においては、34ページの35行目以降に示しておりますとおり、こういう取組は初めから市民全員とか、あとは外部アクターを必ず巻き込むわけではなくて、その段階に応じて専門家とか技術を持ったような形の外部アクターの関与など、多様な専門家だけではなくて外部からの関係人口とか、あとは中の市民とかもかかわった上で、活動人口も増やしていくことの重要性ということで言及させていただきます。

35ページにつきましては、そういう段階的な取組につきましても、段階を踏むごとにおいて、将来の道しるべとか、そういうものも逐次振り返る中で、マス・ローカリズムの視点に基づき、周りのさまざまな取組も踏まえながら取り組む必要があるということ。あと、持続的に取り組む上においては、イニシャルだけではなくて、長期的な展望も踏まえた人や組織の育成、並びに運転資金となるようなランニングコストをどのように確保していくのかという視点についても重要ではないかと言及させていただきます。

36ページに行きまして、この段階的な取組を進めていく上で、図3-18で示しますとおり、攻めの価値創造、並びに守りの生活支援の取組というような視点が必要ではないか。さらには地域の内外をつなぐ取組ということで、これは外部との連携も含まれてくるわけですが、関係人口という概念も含まれてくるわけで、そういう視点も必要では

ないかということで、一例として37ページ以降では、岡山県美作市上山地区の事例を取り上げさせていただいております。

39ページにまた飛びます。②のコミュニティを活かした地域の将来ビジョンでございます。具体的には、41ページの図3-21をごらんいただきたいと思いますけれども、地域の将来像を描く上においては、目標設定型、展開型、ビジョン型というものを地域の状況に応じて取り組むべきではないかということで、地区レベルでは山口市の阿東地福地区、並びに行政単位だと海士町の事例を取り上げさせていただいております。

(3)の内発的発展を支える人材育成ということで、前回の議論もいろいろ踏まえまして、ここでは大きく3つの柱で整理させていただいております。1つはNPO法人とか、あとは行政に近いような取組も含めた人材育成、2つ目が大学における人材育成、③で小学校から高校に至るまでの若年期からの長期的な人材育成という形で整理させていただいております。このあたり基本的にはさまざまな具体例を例示の中で整理させていただいておりますので、説明は省略させていただきます。

(4)で内発的発展を支える様々な拠点、空間、ネットワークでございまして、先ほど2章のコミュニティの議論の中でも場の重要性ということに言及させていただきましたけれども、内発的発展においても対流の場としての場の必要性が重要であるということと、あわせて農山漁村だけではなく、中小都市のようなところ、あとは郊外部におけるような都市部においても同じく重要ではないかということで、「輪島カブーレ」の例とか、埼玉県川口市の芝園団地の例を取り上げさせていただいております。

また、50ページ以降ではネットワークの関連ということで、交通ネットワークの観点でいきますと、自動運転における将来のシナリオに対する考え方、並びに物流ネットワークに関してはECの普及が今後も進む中で、外部からの資金を得るための視点ということで、図3-31のところで概念的に整理させていただいております。また、地域内循環に関する議論の中の多重なネットワークの構築ということが、その圏域間の中での必要性についても言及させていただいております。

52ページの最後のまとめということで、今後の施策展開の方向性を整理しており、今は概要を10行程度でまとめ、将来に向けた検討課題も一例として挙げてございますけれども、これは今年度、2019年とりまとめとして提示するのか、もしくは後で述べます3カ年とりまとめの中で位置づけるのかということについて、ものによっていろいろだろうと思いますし、このあたりについても今日の議論を踏まえて整理させていただきたいと

考えてございます。

時間の都合で、次に資料2-1の3カ年骨子案の整理をごく簡単にさせていただきます。1章でこの委員会の設置趣旨、2章で3カ年の審議結果を簡単に整理させていただいております。3章では、国土形成計画における「対流促進型国土」と「住み続けられる国土」の関係ということで、後ほどこの関係について、資料2-2で説明させていただきたいと思っております。その上で4章から今後の基本的な取組方針ということで、3カ年全体を通した議論の結果、人と人とのつながりの創出、そういうつながりをつくっていくための場の形成が重要ではないかということで、5章と6章の中で、「人」、「場」、「仕組み」という3つの切り口から施策の方向性と具体的な施策のイメージということで記入させていただいておりますので、この点についても本日ご議論いただきたいと思いますと考えております。

資料2-2をごらんいただきたいと思います。そもそもこの「住み続けられる国土」が「対流」にどうつながっていくのかということで、真ん中の表の対流を生み出すメカニズムは、本日も説明してまいりましたコミュニティの創造と内発的発展がどうつながるのかというところを簡単にまとめておりますし、必要な要素ということで、「人」、「場」、「仕組み」という中で整理させていただきまして、次のページではそれをごく概念的に整理したものを表現させていただいております。

説明は以上ですけれども、机上に2枚紙を配付させていただいておりますので、簡単にご紹介させていただきたいと思っております。1点目が、本日ご欠席の広井先生より意見をいただいております。両面長文にわたるものなので、かなりかいつまんで紹介させていただきます。

広井先生からの意見は、1点目としてコミュニティとまちづくりや都市・地域の空間構造について言及してはいかがかということで、コミュニティにはソフトとハードの両面があって、相互に深く影響を及ぼし合っているものであるということ。あと、コミュニティ空間という視点を重視した上でまちづくりや交通政策、地域再生を進めていくことが今後重要な政策の方向性ではないかということが1点目でございます。

コミュニティ醸成型の都市・地域づくりというようなことが今後より一層重要ではないかと考えているので、そうした点を踏まえてもらえないかということで、それが3カ年骨子案における公共的空間のデザインとか、コミュニティ創造拠点の整備というようなことを骨子案に書いてございますので、そういうところが関連するのではないかと考えているところでございます。



2点目が、国（中央政府）の役割ということで、今後、内発的発展という視点も踏まえた展開が進んでいくと考えられるけれども、ローカルな地域というのは孤立して存在するものではなく、相互依存しながら存在していくということ。あと、都市と農村は非対称的な関係性があり、都市に有利な経済構造の中で再分配するような政策が必要ではないか。それによって初めて都市と農村は持続可能な相互依存の関係を維持することができるのではないかということも踏まえた上で、ローカルな地域の内発的発展を支援するような国（中央政府）の政策が重要ではないかというようなご意見で、このような意見を本日の議論の参考としていただけると幸いと締めていただいております。

あと、机上の2枚目に、資料1-1の最後の将来の検討課題として幾つか例についてその背景を示しております。これを全て位置づけるということではなく、議論の端緒として考えていただきたく書いていますので、本日はこの点についてもいろいろ議論をお願いしたいと思っております。

説明は以上でございます。

【小田切委員長】 小路さん、どうもありがとうございました。

お聞きのように、この委員会でかなり濃密に議論してきたということもでございます。皆様方に出していただきましたキーワード、ロジック、それから視察やヒアリングによって得た事例を結びつけながら、あたかもジグソーパズルのピースをはめるような形で報告書をつくっております。かかわった私が言うべきことではないと思いますが、かなり完成度が高いと思いますけれども、一方ではピースのはめ間違いがある可能性もありますので、その点も含めて、山崎さんのお話の後に徹底的に議論していただければと思います。

それで、引き続きまして山崎さんのお話に移らせていただきたいと思います。私からご紹介するまでもなく、studio-L代表の山崎さん、大変著名な方にお越しいただきました。少しだけお話しさせていただければ、何といたってもstudio-Lでの全国の実践です。目覚ましいものがあります。着実にワークショップを積み重ねながら、地域資源を活用していくような取組に私どもいろいろなところで出会い、感動しておりました。そんな経験も含めて、あるいは先ほどの私どもこの委員会とりまとめについて、何がしかのご発言もいただければありがたいと思います。

お手元に資料はございません。山崎代表のこういった場合のプレゼンテーションのやり方として、全体の雰囲気を見ながらシートを選ぶという神わざ的なことをやられております。

それでは、どうぞよろしく申し上げます。

【studio-L山崎代表】 ありがとうございます。30分ということですので、11時まで何かお話をさせていただこうと思いますが、まあ、お話をお聞きしていて、こんなにすごくおもしろい議論をしている委員会があるのを知らなかったという不勉強を恥じた次第です。キーワードとしてもすごく魅力的なものがいっぱい出てきていますし、今日お越しでない広井さんの問題提起もすごく妥当だし、僕の面からすると、何か発展的に一周戻ってきたかという感覚もありますので、自己紹介を兼ねてその話からしていこうかと思いません。

ちなみに幾つかのものをクリックするとその話が出てくるみたいな感じになっていて、今日は2,922枚スライドを持ってきましたので、到底全部話をすることはできないということは僕もわかっていますが、何か思いついたらそのときにぴゅっと出して、それを何かの参考にしていただければと思います。

机上配付資料の中で、広井さんが提示されていたことです。コミュニティといった場合にハード面とソフト面があるよと。特に都市政策とか国土計画に反映させていこうと思った場合、ソフト面とハード面をバランスよくやっていったほうがいいんじゃないか。実はこういうことを研究されている方は、歴史的にこういうことが1970年代に提案されたことを思い出すだろうと思います。70年代も同じことを言われていたんです。広井さんには申しわけない。同じことって言うとそんなことはないんですよ。発展的に戻ってきたなという気がするのですが、実は70年代もそれまでの全総だったり、全国的に何か国土を計画していきましょうみたいな流れから、ハード偏重になってしまっていたことと、それから大規模開発偏重になってしまっていたことに対する反省として、コミュニティに着目しよう。これは横浜市から始まって、全国に飛び火した概念ですけども、それが新しい意味でのコミュニティだと。当時は相当コミュニティ論の方々は戦ったんですね。コミュニティと聞くと、マッキーバーのコミュニティをみんな思い出してしまうので、あのしがらみのある、あいつにまた戻らなければいけないのか、それは危険だというようなことがあったりとか。あるいは頭の中に赤い色を思い浮かべて、コミュニティけしからんと、そこにもうすぐ行ってしまおうという人たちとか幾つかいたわけですけども、ただ、それじゃないよと。マッキーバーさんが言うところのアソシエーション、この会で言うところのテーマコミュニティ的なことです。こんなのも含めた意味でのコミュニティというのを考えなければいけなくて、ソフトとしてのコミュニティを考えたほうが良いという話にな

ったんだけど、ソフト面を——インターネットがなく、SNSという言葉がなかったというのは大きいと思うのですが——あまりそこを深められないまま、結果的に計画論に落とし込むと、コミュニティセンターとか、コミュニティプラザとかいうようなものをコミュニティ計画の中に位置づければ、場ができれば、結果的にそこに人々が集まるだろうということになったんです。だから、我々がよく見るニュータウンの開発とかは、真ん中に必ず広場があって、コミュニティセンター的なものがあるものがあって、公民館という名前をかけたところがいっぱい出てきたのもその時期です。80年代ぐらいから全国で公民館をコミュニティセンターと呼びかえて、もっと広い意味で捉えようよってやりました。

ただ、ここで提案されたことはすごく重要ですけども、ハードとソフトを本当にバランスよく進めることは思ったより難しく、結果的にハード面はハード面でコミュニティ何々をつくりなさいという予算として配分され、そしてソフト面はソーシャルワークだったり、コミュニティケアとか、コミュニティ社会教育だったりという方向にばかり行ってしまうので、この両者の連携が全然とれないまま、この広井さんの提案というのは、予算で現場に落ちたら、結局つながらないまま設計されていってしまう、こんなことを目にしましたね。なので、90年代ぐらいになるとそれがすごく顕著になって、各地にコミュニティ何々ってできたのに、地域の人たちはそれができたことを知らなかったというようなことがすごく多くて、ごく一部の人たちだけができ上がったコミュニティ何々に対してかかわったりとか、利用したりするのですが、早晩そういう場所は使われないことになっていて、いつも同じ人が同じ曜日を予約していて、何の発展もないねみたいなことで、あれは本当の意味の社会教育だったのかというようなことを言われるようになってしまいました。

自己紹介はここからで、実は僕はそのあたりから建築の設計の勉強をし始めたので、コミュニティ何々っていうのがハードとソフトのバランスがすごく重要とされているのに、設計の現場では住民参加なんてことはほとんどされずに、コミュニティ何々をついた空間をうまく機能するようにデザインさえすれば、人々は勝手に集まってくるというような感覚で設計がされていました。つまり空間が砂糖のようで、人々はアリのようで、魅力的な空間をつくれれば人々はそこに勝手に集まってきてつながりができるという認識になっていたんです。誤った認識になっていました。デザイナーとしてそれがすごく気持ち悪かったというのが、設計から今のコミュニティデザインみたいなことをやるきっかけになっています。だから、公園もそうだし、コミュニティセンターもそうだろうし、あるいは広場も



につくっていくというようなことはやっていますかと言うと、そこはそんなにやっていない。それをやりながら、仕組みというのを即時的につくっていくというような取組をやっていますかと言うと、仕組みは仕組みで頭のいい人たちがつくっているみたいなことになっていたりします。だから、対流の場と人と仕組みが必要だと言っているんだけど、じゃ、よくできるコミュニティデザイナーとかファシリテーター的な人をまずよそから呼んできて、人をつないでもらおう。場は？ 場は何かおしゃれなデザインができる人がいるから、おしゃれな人が対流空間をデザインしてくれたらいいだろう。仕組みは？って、仕組みは行政とファイナンシャルプランナーやコンサルタントの人たちと一緒に、いいこんな図を書いてもらいましょうと。それを3つばらばらにやってしまったらすごくもったいないです。それを人々が学びながら、勉強しながら、自分たちの意識も上げながら実現させていくというのがいいと思います。

ただ、いいと思うんだけど、これには時間がかかるんです。今言ったみたいに専門家を呼んできてやってもらえば短い時間で何か成果が出せるんです。なので、霞が関にいる方々としてはどう考えればいいのかですけど、1年か2年の間に各基礎自治体にこういうことをやってと言って、それぞれにぱっと人と場と仕組みができ上がりましたという成果を出してもらいたい場合は、専門家が人、場、仕組みをパンとつくってもらったほうがいいんでしょうけれども、ただ、現場としては予算をたっぷりつけてもらうよりも時間をたっぷりつけてもらって、地域の人たちに集まってもらって、ああだこうだ言って、何度言ってもわからない、全然考え方を変えてくれない人たちとともに対話をしながら、この人たちの意識が変わる速度に合わせてプロジェクトを進めていくことをやらないと、人と場と仕組みが混ざり合いながら実現していくというのは難しいんじゃないかという気がしています。

出すべきスライドがだんだんわかってきました。2, 9 2 2枚持ってきたとか言っておきながら、スライドが1枚も動かないまま帰るという危険性もあるんですよ。ここを注意しておかないと、僕はしゃべるだけしゃべって、2枚しか動いてなかったねみたいなことになることがあります。何か我々が資本として考えているものってどうしても貨幣資本ばかりをイメージしてしまうのですが、貨幣だけが資本じゃないです。だから、2年でたくさん金をつけるのだからやりなさいとぼんとやらせるというのも、人と場と仕組みをつくるために大事なこともかもしれないのですが、それで何かさっとやろうと思ったらどうしても専門家だけで進めざるを得ないんです。行政の担当者とか、物わがりのいい人たちだっ

たり、外部人材だったりとか。でも、これってさっきおっしゃっている内発的発展ということにならんですよね。内発的発展というのはそこにいる人たちを、住民自身が話し合っていてということもそうなのですが、住民の内発でもあるんです。住民の内部が変わっていないと内発的発展にならんと。すると、成長していることが前提になるんですけれども、内発的発展って社会教育分野や国際貢献分野から出てきた言葉ですが、その内部が発展しないと。つまり人間の中身が変わらないと関係性は変わらないし、関係性が変わらな思考は変わらないし、思考が変わらな行動も変わらないで、行動が変わらな結果が変わらなというのはマサチューセッツ工科大学、ダニエル・キムさんが言っていることですよ。

だから、内発的発展をやろうと思ったときに必要な資本は何かといたら、金をたくさん積んでもらったらできますかという話とは違って、いや、猶予をくださいと。だらだら進めさせてください。そりゃそうですよ、みんな農業をやっていたり、旅館をやっていたりして専門は別な人たちが地域づくりについて考えなければいけないので、ここにお集まりの皆さんのようにこの分野についての専門知識がたくさんあるわけではないので、この分野についての専門知識を徐々に学んでいく速度に合わせて地域づくりを進めていかないと、うそだと思うんです。それより早い速度で成果が出ているとすれば怪しんだほうがいいです。それは何かよくできる人がいて、その人が引っ張っている可能性がある。すると、この内発的発展ということはなかなか言えなくて、その人が倒れたら活動がとまりましたという、日本の地域づくりに過去かなりあったでしょうね。よく有名になった事例が、あの人がいなくなったらとまりましたというものが、短時間に盛り上がったからだろうと思います。僕は雄谷さんはすごく親しい友達で、先週も会っていましたが、雄谷さんが倒れたら佛子園は大丈夫かということは、常に雄谷さんに言っていることです。だから、雄谷さんが全然働かなくても何だかうまいこといくよというような仕組みにならなければいけないだろうと思うのですが、佛子園が今どういう状況になっているかどうか。それは雄谷さんとこれからも話し合っていきたいと思います。ここに出ていたカブーレとかもそうですし、シェア金沢もそうだろうと思いますけれども、彼のアイデアがかなり入っています。パターン・ランゲージの本なんかも彼はかなり読んでいますから、かなりアイデアが入っていますけれども、内発的発展と呼べるかどうかというのは引き続き彼らとも議論していきたいところだと思っています。

さっきダニエル・キムの話も出てきましたから、もうご存じの方も多いと思いますけれ

ども、念のため、結果を求めるようなスタートはやばいよというようなことを言っています。マイナスの循環ですけれども、結果を出せ、結果を出せと言われるのは、これは組織も一緒ですが、結果を出せって言われているよということから始まるわけです。それなら人間関係としてはどうかと。そこにいる部下、あるいはコミュニティの方々、行政から結果が出ないコミュニティ活動はだめだとか言われていると、ほんならおまえ何かやれやと、おまえこそ考えろやと、どうしたええねんというような関係性になってしまいます。それが対立や押しつけという関係です。この関係のまま話し合いとかを進めても、アイデアとしては受け身で無難なものしか出てこないでしょうね。ほんならこれやっところや、どっかが成功していると言っている、成功事例とか言っている、横展開とか言っている、これをやっておいたらとりあえず上は何とか言うんちゃうというような部下たちがいますし、そういう住民が出てきてしまいます。

そんな人たちがやってみるとどういう行動になるか。消極的、誰かに依存するような活動ばかりが出てきちゃうんでしょね。これは僕らが言っているところの活動人口とはなかなか言えないタイプの活動です。このタイプの活動をやってみてどうだったかという、そんなにうまくいかないんです。みんな消極的だし、誰かに頼ろうとしてやっているわけですから、行動がうまいこといかないなということになると、結果は出ないでしょうね。さらに結果が出ない。出ないと関係性がどうなるか。おまえがやろう言うたからやったのにうまくいかんかったやないかというような、また悪い結果になっていってしまいます。

なので、結果から入るのではなくて、まず関係を耕すことから入ることが大事だというのがダニエル・キムさんの言うことで、これは地域づくり、内発的發展に対しても言えているなと思う点です。まず、人間関係をきっちり使う。これに時間がかかるんです。だから時間資本が大事で、何かアイデアを持っている人たちって思考から入ろうとするので、時間が少なくても予算さえあれば実現できますみたいなタイプですけれども、そんな短時間に地域づくりを成功させてもらったら、地域の人たちが困るんです。だから地域の人たちって、中山間地域へ行くと、もうこいつらとは生まれたときから知り合いだと。そんな人間関係とか、アイスブレイクとか、自己紹介とかをやらせんといてくれと、もうみんな顔見知りやと言うんですけれども、それを信じてはだめです。大体そうです、自分の嫁さんだって何を考えているかわかっていないわけですよ。皆さん、わかっていますか。大丈夫ですか。自分の旦那さんが本当に外で何をしているか、わかっていますか。そんな地域

で生まれたときから一緒やなんて、何もわかっていない人たちの集まりです。お互いに何も知り合っていないです。その人が隠れてこそこそ何をやっているかなんて全くわかりません。昔よく言われましたね。赤い靴履いて集落から外へ出ていったら、帰ってくるころには、あの人、赤い靴履いていったわよってもう噂になっているとかね。そんなのでわかった気になっているんです。

農村地域の人たちは相互にほとんど何もわかっていないということを、農村地域でワークショップをやってよくわかりました。それは後で幾つかの事例をお見せしますが、本当に小学校のときにその人が失恋していたことも知らないっていうその相手とかが、そうだったの？って愕然とするみたいなことがあります。その人がなぜいつも女性の権利の話ばかりするのか、ジェンダーの話ばかりするのか、地域の人たちは全くわかっていなかった。でも、その人のお父さんとお母さんが早くに離婚されていて、お母さん一人でどれだけ苦勞して自分を育てたのかということがずっとあったから、会議のたびに出てくる言葉が女性の権利の話だったということ、背景を知ったら聞けるようになるんです。でも、背景を知らないと、この人の言っていることは全部正しいんですよ。男女共同参画、男女の権利は平等であるべき、女性が今まで虐げられてきた、言っていることは全部正しいんだけど、ワークショップ10回目でもいつも同じことを言っていると、もうみんなうんざりしているという状態に対して、その人の生まれ育った背景が理解できた瞬間に、「わかるよ」って聞けるようになるんですけども、そんな関係をつくらないままワークショップ的なことを続けていると、話し合いは前へ進まないんだろうと思います。だから時間資本もたっぷりつぎ込んで、対話や信頼というものをちゃんとつくり上げていって、考えているアイデア、これを言ってもみんな「いいね」と言ってくれるね、否定はされないね、一緒にやろうぜって、ノリがいいという安心感の中でアイデアを出せるかどうか。まず、その状況をつくらなきゃいけないですよ。

集落でこれを言ってもきっと否定されるなどか、あの長老にだめだと言われたらもう絶対だめだよなどか思っていたら、もうアイデアを出そうという気持ちにもならないので、OSTとかワールドカフェとかをやればワークショップだと思われてしまうと困ります。テーブルをニコイチにして、その場に6つ椅子を並べて、模造紙と付箋を置いて話し合いをすればいいアイデアが出ると思っていたら、それは思われているんですけどね、20年間、この国はワークショップアレルギーになってしまったんです。どの地域に行っても僕らは嫌われていますね。もうワークショップという言葉を使った途端に、さっき「島の幸



福論」が出ていました海士町というところに2007年から6年ぐらいかかわって、総合計画をつくりました。写真に出ていた絵は自分で描いた絵です。僕が島を絵具で描いた絵ですけれども、あそこへ行ったときももうアレルギーです。海士町って意識高い系がすごくいっぱい行っている町で、ワークショップ的なことをいっぱいやってきたので、もうみんなワークショップが嫌いでした。だから僕らが行ったときも、またそれやるんかと。あれやろ、模造紙と付箋やろって、ブレストとKJ法とかやろみたいに。基本的にあれを嫌いです。それっていうのは、関係というのをしっかりとやらないままにアイデアを出しなさいと言われていて気持ち悪さに起因していることが多いです。

地域包括ケアについてどうしたらいいと思いますかなんて今日初めて聞いたお題に対して、はい、付箋に意見を書いてくださいとか言われて、地域包括ケアって何でしょう、医療とか福祉の将来のことですよ、わかりました、じゃ、病院の待ち時間が短いほうがいいですとか何かいろいろ思ったことを書いたら、何かそれをやたら丁寧に扱われてしまって、いい意見ですねとか言って、この辺同じ意見ですねってまとめられてしまうあの気持ち悪さですよ。そんなの集まった人たちは、僕の意見なんか丁寧に扱ってほしくないんです。今日聞かれて思いつきで言ったことが政策とかにのられてしまうと、政策立案者は、地域の意見を採用したから、みんなを巻き込んでつくった総合計画ですとか言って、喜んでいっているんです。でも、住民は物すごく気持ち悪いです。きのう今日聞いた話で出した意見が、政策とかに反映させられてしまう気持ち悪さ。今出した付箋はなかったことにしてほしいと思って出しているのに、何か丁寧に扱われて計画の中に入ってしまう。ここに集まっている同じような意識レベルの方々が出した意見をこうやってうまくとりまとめて報告書にまとめる。これはみんな気持ち悪くないですし、自分の意見が採用された気持ちよさというのがあると思います。それはそれなりに実績を積んできたし、そのことについて考えてきているからです。でも、地域づくりに集まってくる内発的発展と呼ばれる構成員の方々は、ふだんはどうやったらうちのホテルのお客さんが増えるかということを考えているし、どうやったら農作物の収穫量が増えるかということを考えているのに、集まってきて地域包括ケアについて意見を出してくれと言われた意見を、丁寧に扱ってほしくない。

だから、丁寧に扱ってもらってもいいなと思うぐらいまでの関係性をつくる時間資本を我々は基礎自治体に与えているかどうかというのはすごく重要です。最後の問題提起のときに国としてやれることって何なのかとありましたけれども、予算というのが貨幣予

算のことを言っているのか、時間予算のことを言っているのか。議会に折衝して時間予算を獲得すると。2年でやれるだろうと言われたところを10年やらせてくださいってちゃんとその理由を述べるができる行政職員が全国にどれぐらいいるのかということも大切だと思います。それが人と場と仕組みを混ぜながら、参加型でつくっていくということにつながるだろうと思うんです。参加型というのは、つまり学びながらつくっていくことです。人々にインプットなきところによきアウトプットはないだろうと思いますから、情報が何も入ってきていないのにいい意見が出るというのは、うそっぽいんだろうと思います。情報を入れる時間というのが必要になってくると思いますから、そういう関係、対話、信頼、そして気づきや発想はいいものが出てきて、挑戦してみよう、協力して一緒にやってみようという行動ができれば、結果としてはいい結果が出てくるでしょうね。結果をちゃんとみんなが実感できるということです。上司や役場の人たちだけではなくて、それぞれの人たちが結果を実感できれば、この結果は我々みんなが出したものだよねという信頼関係がさらに向上する関係性が生まれますので、この関係からアイデアを出して、活動してみようというサイクルを生み出す必要があります。

どこに注力しなければいけないか。だから、施策や事業を早く考えなさい、考えたのだったらすぐやりなさい。この思考とか行動の部分から入ってきて、結果を出しなさい、KPIを設定しなさい、年度末には報告しなさい、監査が入ります、検査しました、やっていますねというのをぐるぐる回しているというようなことを住民不在でやるのはもったのほかですけれども、住民参加をそのサイクルの中に入れないようにしてもらいたいと思います。そのサイクルの中で住民にKPIとか言わないようにしてもらいたいと思います。KPIなるものではかれないところに住民の成長があるんです。逆に言うと、集まってくれた100人の住民の何割が成長しましたかみたいなことをアンケートでとって、そいつをKPIとして設定しておいてどれぐらい行けましたかとかいうようなことを聞く時間はないです。そんなことをやっているのだったら、もうもっと時間をかけて人間関係を耕したほうがいいんじゃないかなと思っています。

さて、あと10分だ。何か話しましょう。智頭町から、海士町みたいな総合計画をつくりませんかと頼まれたんですけれども、我々はデザイナーなので、いつも前にやったこととは違うことをやりたくていしようがないんです。だから、あれはやれませんかと言って、また智頭町は全然違うやり方をしちゃいますが、人口は7,000人ぐらいです。森林が98%あるようなところなんです。高齢化率はそんなに高くないんです。こんなにいいところ

まで行っているのに、中山間地域で言えば38.9と言ったら、ああ、そうですかぐらいのものでしょね。50にはそんなに近くない。若い人が結構入ってきているというのもあると思います。

総合計画をつくる時にまずここでやったのは、役場の職員をコミュニティデザイナーに仕立て上げるということです。なので1カ月ぐらい研修をして、いきなり住民を集めないうで、あなたたちが住民の中へ行ってファシリテーションできるようになってくださいと。これからの行政職員は住民参加必須ですから、それができる職員になってくださいねと言って、育てて、めちゃ緊張している人たちを住民の中に入れて、テーブルにつかせて、この辺飛ばしてしまいますけれども。住民の方々とワークショップをやる前に、研修をやった役場の職員に、総合計画、これから10年の計画をつくるのだから、これまで10年何をやってたのかというのを棚卸ししてれと言ったんです。それで、棚卸ししたら300の事業をやっていたことがわかりました。この300の事業を住民に見せるときは、もうややこしい資料を出さないでくれと。カードにしてほしいと言って、何かこんなA4のカードみたいにして、それぞれが300枚つくったんです。各課がどんな事業をやってきたのかというようなことを書いて、この紙をこのぐらいの部屋のテーブルの上に並べました。各課ごとに10枚から15枚ずつ並ぶわけですがけれども、ずらっと積んだんですね。住民100人ぐらいが集まってくれたので、300事業あったわけですから、100人だとそれを1人3枚読んでもらえばいいんですね。3枚読み込んでもらって、床にマスキングテープを張って、0歳、10歳、20歳、30歳、40歳という目盛をつけました。今3枚読んでもらったやつ、それぞれ大体何歳代ぐらいを対象とした事業だったか、その床に並べていってくださいと言って、事業を並べてもらいました。これは子育て層やな、大体30代ぐらいの人かなとかね。これは子供やから10代かなとか、0歳から10歳かなとか言って、それぞれのところに並べる。これは全世代だと、どこって分けられないというのを一番右側に集めてもらうということをやりました。

それをこっちでまとめていくと、0、10、20、30、40、それぞれのところに事業が入っているわけです。50、60、70、80ですね。70代が少なかったです。あまりやってない。あと、40代も少ない場所がありました。あるいは人生90年時代とか100年時代と言いますけれども、90歳までの間、80、90という高齢者向けがあまり多くなかったんです。ただ、全世代に向けてというのもあります。このうちの一部はこっちに入ってくるわけですがけれども、これで世代ごとにやっている事業というのをまず分

けたんです。分けると、今見ていただいたとおり、パワーポイントで3枚分になります。つまり、横長のシートになるんです。皆さんの前にある長テーブルみたいなシートはA0のプロッターで出すとどわーっと出てくるので、10個のテーブルに分けて、住民100人に座ってもらったら、それぞれ10個のテーブルにレシートみたいに出てきた大きな紙が前に置いてあるんです。そこにこれまで10年間、智頭町の役場がやってきた施策がずらっと並んでいるわけですが、皆さんも同じ長さのペーパーを用意して書いてもらうというようなことをやりました。

なので、このときにやったのがさっきの関係性をみんなに知ってもらいたいなことをやりました。細長い紙に、これはもうわかっている人もいらっしゃるかもしれない。自分が今何歳かというところに線を引いてもらって、45歳と。3つに分けて、自分個人に起きた履歴はここに書き込んでいってください。20歳のときに何が起きましたか、30歳のときに何が起きましたか。自分の友人とか家族に起きた出来事という過去の出来事をここに書いていってくださいと。地域に起きた過去の出来事、うわ、こんなのあったよとか、このときに小学校が統廃合されたよとか、この企業が撤退したよ、地域に起きたことを書いていってくださいと言って、過去に起きた出来事を書いてもらいます。これから自分が個人として、何歳になったときにどうしたいのか、何歳で死にたいのかということを書いて、自分の家族、将来どうありたいのかを書いて、自分の地域、どんな地域をつくりたいと思うのかというのを未来として書いてもらいます。

この長さが、さっき言った行政のやつと同じ長さになっているということです。真ん中に置いているものと同じです。なので、これをそれぞれお互いに話し合うと。これをつくるのだけでも結構な時間がかかりますけれども、自己紹介に40分かかります。40分間自己紹介しましょうと言って、こんなのをお互いにずっと話し合いをしながら、そうか、あんたそこで失恋してたの？とか、だからこういうことをやったのねとかいうようなこと、知ってもらいたいようなことをやります。その人間関係をきっちりをつくっていった上で、これがさっき言った行政の計画とぴたっと合わせると同じ長さになっているので、それぞれが生きてきた履歴や未来に対する希望、それから行政の施策のあり方を組み合わせて話をするということになります。

高校生とかも来てくれていましたけれども、自分が30代になったときに自分は起業したいと思っていると。その30代になったときに、起業したいと思っているんだけど、役場の施策を見たら、起業支援というのがないよねと。もしここに起業支援があってくれ

れば、私はもう一回智頭町に戻ってきて会社を起こそうと思うんだけどって思える。もしそれを採用してくれたのだったら、彼女は一回外には出るでしょうね。大学出る、就職するけれども、細かいことは全部忘れたとしても、いつも頭の片隅には役場は私を応援してくれているだろうなという感覚だけは持っている。だから、将来起業しようと思ったときには、地元に戻って会社を起こす、そうしたら何か支援をしてくれるだろうというような安心感を例えば持ってもらうとか、そのようなことをやっています。

これは今説明したことなので省きます。町のやつと町民、ある人の、40年に誕生したんですけれども、どんなことが起きたのかというのを照らし合わせていってもらくと、その人は今51歳です。というのをやっているというようなペーパーで、上と突き合わせて考えることができるというようなことをですね。80歳で死ぬと書いていますけれども、早過ぎますね。80は早いんじゃないか。でも、そういうふうにやると行政に対して自分ごととしていろいろな意見が出てくるんです。こういうのとか、モデルケースの紹介とか、これは活動人口の話をしたからでしょうか、活動人口を増やせとか書いていますね。ネットを使えとか、なぜこの人こんな上から目線なの？ と思いますけれども、こういうことを行政、自分の人生から引っ張ってくるとこういうものになるんです。あと、この辺は褒めていますね。手厚いと書いていますけれども、そうやってちゃんとその意見を施策に反映させていくことと、でも大事なのは、実は知り合った人たち同士がこれでプロジェクトを始めてしまうということです。総合計画に提案した内容を住民自身が活動として開始してしまうということです。

この後もワークを何度も繰り返すわけですがけれども、人生の履歴や将来の展望と重ね合わせた総合計画を提案するとともに、本人たちが相手のことを心底知ってしまうとか、惚れてしまうとかいうような状態をつくって、その関係性の中から、私たちは地域のために何ができるの？ という地域づくりをつくっていくということです。こっちは施策なのでもう飛ばします。総合計画をつくりましたということです。それぞれの人たちの人生に寄り添うような計画をしましようと言って。

あと、海士町のときも別冊という絵本みたいなやつをつくったんですけれども、ここでも別冊をつくりたい、つくってほしいと言われたんです。絵本みたいなのをつくってと言われたのですが、さっき言ったみたいにあまのじゃくですから、僕らはもう絵本は作りませんと。今回は地図帳をつくりたいですと言ったんです。智頭町の地図帳が大事なんじゃないかと。我々は観光マップとか住宅地図とかという、地図をいっぱい持っているんで

すけれども、縮尺が合わないので、ページをぺらぺらめくって、ああ、だからここでやっているのねみたいなのがわからないことが多いんです。これ全部縮尺を合わせてみましょうということで、例えば智頭町の人口と高齢化率、この青いところになっているのがどれぐらいの高齢化率かみたいなやつと、人口の多い少ないで、丸が多い少ないになっているんですけれども、各集落の状況を把握して、ぺらっとページをめくると同じ縮尺で、総合戦略の活動が今どこで行われているのかがわかるようになっていきます。なので、自分が住んでいる集落以外の集落でも、前へ戻ってもらうと、ああ、この人口の、これぐらいの比率の、これぐらいの高齢者の集落でこんな活動をやっているのやなみたいなのを照らし合わせることができるようになっていく。さらにぺらっとめくってもらうと、それぞれの人が活動している地域みたいなのが見えてきたりします。なので、総合計画で提案した活動を町内の一体どこでやっているのかみたいなこととか、どうやって応援してほしいのかということがページに書いてあるという60ページぐらいある地図帳なのですが、全戸配布しました。

こういう情報がなかったのよねと結構言ってもらって、喜んでもらったそうです。改めて地域の地図帳をつくるみたいなことをやってみたくて、今しゃべるとそれなりにやったように思われるかもしれないのですが、これはもう智頭町役場というところから電話があったときに、地図帳をつくりたいなと思っていましたね。何町ですか？ 智頭町ですと言われましたからね。こんなのもう地図帳をつくるしかねえじゃないかと思いつつ、プロジェクトを進めていたのですが、担当したのはうちの若い女性で、すごく嫌われました。そんなオヤジギャクみたいなことしたくないですとずっと言われたんですけど、社長の権限として、つくれと言いましたね。案外喜んでくれたと。この後はご想像どおり、海士町でもありましたけれども、活動をいっぱいやってくれましたみたいな話なので、時間の関係で省きますが、何だかいろいろ動き出しましたということです。

それはいいんですけど、そんなの結果ですよ。だから結果は、さっきあったとおりです。どっちでもいいと言ったら怒られてしまいますけれども、やればいいんです。ただ、やればいいんです。だけど、その結果に導くまでのプロセスが一体どういうふうに進められていたのかということによって、この活動がちゃんと後まで続くものになるかどうかが決まります。何か特定のリーダーだけがノリノリになって引っ張っているみたいなのではないようなやり方です。時間はかなりかけました。通常は総合計画をつくるのに1年や2年でポイとつくってもらうというのではないぐらいの時間をかけましたし、町長がそ

れでいいと言ってくれたことはすごく大きかったと思います。その結果、役所の職員を鍛え、彼らの意識を変え、意識が変わった役場の職員とともに地域住民が学び、学んだ人たち同士が関係性をつくり、関係性の上で意見を出したらみんな賛同してくれるよねという安心感の中でアイデアを出し、出したアイデアをそれいいね、もっとこうしたほうがいいんじゃないかってさらに事例をぶっ込んできて、自分たち地域オリジナルの活動まで仕立て上げ、活動をやってみたらめっちゃみんなに喜ばれて、自分たちも楽しかったから、俺らみんなでつくった成果だよねと言ってやっているというようなサイクルを回していくことです。我々はそれを地図帳の上に載せて、みんなに告知しただけです。そうしたら、そんなのやっているんやったら私らも応援せなねと言って、地域の人たちがその活動、自分が気に入った活動を応援しに来てくれるというようなことになったんです。地域のじいちゃん、ばあちゃんが地図帳を読んで、何やあの子らこんなことをやっているのかいと言って、ほうやったら私も応援しよかというふうにして、お菓子を持ってきてくれたりとか、お酒を持ってきてくれるようになったというだけの話です。

だから、途中から先は大体どこでもやっていることです。人々がワークショップなるものを作って、アイデアを出して活動して、それがうまくいきましたみたいな、あと総合計画ができましたみたいな話ですけれども、結構大事になるのは、関係性を丁寧につくって、彼ら自身が学ぶという時間資本をちゃんと獲得できたかどうかです。だから、国から施策展開していったときに、一体どういうことを評価指標としようとしているのか、何を応援しようと思っているのか、本当にそれ金だけでいいのとか、人材派遣するだけでいいのとか、その人材は一体どういうふうに進めようとしている人なの？ それがさっきの人の部分だろうと思いますが、人の部分と人々が集う場をつくって、対流の場をつくっていくことと、仕組みをつくっていくというこの3つをうまく進めていくために必要な金と時間をどういう割合で設定しているのかみたいなことが大切になってくると思います。あとはそれを知って、ちゃんと丁寧に物事を進めていけるようなファシリテーターになる人材です。こんな人たちをどうやって育てていくのかみたいなことが重要になってくるのかなという気がします。

幾つかまだお話ししようと思ったことがありましたけれども、時間が来てしまいましたね。後の話の中に入れておきましょうか。発展段階がありましたよね。立ち上げ前、立ち上げ、実践、継続とありましたけれども、より細かく見ると、パックマンの発展モデルというやつがありますよね。これも地域づくりではよくあることなので、もし興味があった

らまた調べてみてください。形成期、そして混乱期というのが必ずあります。人となりが変わった途端にけんかし始めたりとか、ワークショップに出てこなくなったりします。でも、これを乗り越えると秩序期というのが生まれます。あの人は口ばかりやなと言ってみんな嫌っていたのに、口ばかりなんやったら口ばかりという役割があるなみたいなことがわかってくると、いい秩序ができ上がってきます。その秩序ができ上がってくると、機能する団体になっていきます。ファンクショナルになります。なので、この4段階をどういう配分で、要するに僕らにとってみれば、混乱期なんて早く来てもらったほうがいいわけです。形成期というのは、集まって何かやろうと言っただけで浮かれている状態です。ワークショップでアイスブレイクやって、最初は私たち何かいいことできそうですよねと大体いつも盛り上がるんです。なので、こんなの早く吹き飛ばしたほうがいいんですね。本当に盛り上がっていて大丈夫と、この人嫌な人じゃないみたいなことを早く気づいてもらって、そこでけんかを早く起こしてほしいんです。ワークショップの参加者が100人から20人に減るとというのが大事です。減ると何が大事かという、減ってもしつこく来続けた人が誰なのかをみんながわかるからです。減った後、活動がおもしろくなるとまたふわふわした人たちがまた集まってくるんです。これで50人とか60人ぐらいに増えていきますが、このときリーダーが誰なのかはもうみんなわかっているんです。減っているときもしつこく頑張った人って誰だったかはもうわかっているから、改めて決めなくてもいい。そして秩序ができて、機能するんです。

でも、もう一つよく言うのは解散期を設定してくださいと言います。あなたたちが今やろうとしている活動は一体何年で解散しようと思っているのかを最初に設定してください。3年後にやめようと思うんだったら、それはそれでいいと思っています。やめてもらいたいんです。むしろ活動を長く続けてほしくないです。その人たちはとてもできる人たちなので、この段階を通じてとても学んで、成功も失敗もいろいろやってさっきの関係をやった人たちなので、地域にとって宝です。宝が1カ所に集まって活動するって全然いいことじゃないんです。ある時期が来たらこの宝の人材は解散して、それぞれの先でまた自分が本当にやりたかったことのチームを集めて、宝を配分してほしいんです。自分が経験したこと、やり方を。だから、3年後に解散すると言ったら、僕らは3年後に解散してくれって言いに行きますね。でも、宝は結構仲がいいんです。だからみんなもっとやりたい、もっとやりたいと言うので、じゃ、1年だけ延長していいですよと言って活動を4年間やってもらいました。4年になったら、はい、解散と言うと、いや、今は乗りに乗っているんで、



会社を起こそうと思っているのかと言われて、あと1年だけねと言って、5年と。これをずるずる続けて、10年続いてしまいましたら悪くないです。だけど、10年やりなさいと言われて3年目で解散するというのは、逆に不幸なことですね。だから解散期を設定して、そのとき解散しようとして宝を分散させて、分散させた先でさらにいい活動を生み出そうという努力をさせるべきだろうと思いますし、しかし、そうでもなくて、宝の人材が宝の人材だけに結構ずっと続いてしまったということでも、次善の策として悪くはないです。悪くはないんだけど、長く続けろと言ってすぐに解散しちゃいましたみたいな効果のないような施策というのは、お勧めできないなという気がします。

もういつまでも続いてしまうので、この辺で一旦一区切りにしますが、僕の話提供はこれぐらいにしておこうと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

【小田切委員長】 山崎代表、どうもありがとうございました。

お聞きのように、山崎代表は実践家としても著名なのですが、実は若いころから一緒に学会活動をしておりませんが、大変な理論家でもあります。理論ベースの議論もかなりあったと思います。それから、議論は我々とかかなり共有化できる部分があったと思います。こうさせていただけますか。今から大体1時間10分の時間がありますので、前半20、30分を山崎さんに対するご質問、あるいはそれからの発展などを議論していただきまして、徐々にこの報告書に話題を移していきたいと思います。

それでは、今のお話、目の覚めるような話でありましたが、どうでしょうか。皆様方からご質問などをいただければと思います。

それでは、私からまず1問お尋ねしたいのですが、今のお話の中でコミュニティデザイナーはどこに位置づきますか。そして、そのコミュニティデザイナーというのは、智頭町では内部で育成していただいたわけなのですが、基本的に内発的発展である以上は内部と考えるべきなのか、あるいは我々が議論しているように外部もあり得ると考えるのか、このあたりいかがでしょうか。

【studio-L山崎代表】 ありがとうございます。コミュニティデザイナーは智頭町の話で言うと、智頭町役場の職員の研修にかかわり、職員がファシリテーターというか、コミュニティデザイナーとして各テーブルに入ってきていただき、そこに伴走している役割でした。なので、智頭町の場合は僕も入れて3人のスタッフで、我々は運営したんです。さっき言ったプロジェクトリーダーになっている女性と、それからその下で、ワークショップで使

うツールのデザインとかが必要になりますので、うちのグラフィックデザイナー、プロダクトデザイナーがついたので、3人がぐるぐる会場を回りながら、それから何かガツンと言ってくださいと言われたときには何か理論的なことだったり、海外の事例だったりをマシンガントークでしゃべるみたいなことをやる時があつたりします。そんなのをコミュニティデザイナー側がやっていて、だから会議が終わるといつも役場の職員が集まって、反省会のようなことをやって、どのテーブルでどんな意見が出たとか、あの人、今テンション下がっているみたいなこととか、どうするんやみたいなこととかをやっているのもコミュニティデザイナー側です。

なので、役場の職員を指導したと言うとおこがましいのですが、役場の職員とは違う視点から一緒にプロジェクトに取り組んでいたのがコミュニティデザイナーだと思います。役場の職員のほうがわかっていることもいっぱいあります。施策だったり、事業だったり、予算だったり、あるいは物の考え方、役場の庁内でどうやってコンセンサスをとったらいいいのか、議会にどうしゃべったらいいいのか、この肌感覚は我々にわからないところですので、そっちはそっちのプロとしてやってもらいますし、住民の意見のとりまとめ方、あるいは意見の引き出し方、あるいは斬新な事例を紹介するのはこっちから紹介したほうがみんなに、住民の方々に響きやすいですね。なので、そんなことをやったり、とりまとめた内容を冊子にしていくとかいうようなところはコミュニティデザイナー側でやっています。そして、もちろん文言、コンサルタントの方々が書いて、各課へ確認に行ったりとかいうのもコミュニティデザイナー側がやっています。そして最終的な本ができたり、智頭町の地図帳ができたりする、こっちを制作しているのもコミュニティデザイナー側です。

住民が活動を開始したあれをサポートしているのは、僕らがやったのはもう活動の初動期1年ぐらいですかね。今年ももううちのスタッフが、呼ばれて1回だけ行っています。でも、年に1回ぐらい行くだけです。あと、フェイスブックとかで何か質問があつたら答えています、ほとんどのことは役場の職員がやってくれていますので、活動がうまく展開していることについてサポートがうまいのは誰か？と言われれば、僕らではないです。役場の職員が優秀で、そこをちゃんとやってくれているという感じです。

だから、これを内発的発展と呼ぶのか、僕は呼んでいいんじゃないかと今思っているんですけども、地域住民がまずつながり、活動のアイデアを出して動き出したので、そういう意味では内発的だろうと思います。きっかけは役場が総合計画をつくりたいと思ったことであり、その進め方を外部から来た我々のような人間とともに、今言ったようなかか

わり方で伴走したことなので、内発的発展には外部から来た人間の刺激もあると思います。ただ、外部の人間がどれぐらいまでずっとその内発の中になければいけないのかについてはわかりません。うちの場合は3年で去ると決めていますので、3年間たったらその地域からいなくなるということを目指して、大体プログラムを組んでいることが多いです。ただ、そこに我々コミュニティデザイナー的な技術を持った人の中につくって帰ってくるというようなことをよく意識しています。

それと、コミュニティデザイナーの仕事の仕方ですけれども、これも長くないように、さらっとだけご説明します。今ちょうどやっているのがこれですけれども、厚生労働省さんからすごくでかい予算がついて進めているやつなのですが、全国8ブロックでさっき言ったことを同時進行しているんです。北海道ブロックから九州ブロックまで、大体60人ぐらいの参加者がいる場所ですけれども、介護や未来のこれからを変えてこようと。そのときの参加者の半数以上、6割が医療・福祉・介護関係者なのですが、それ以外にデザイナーとかエンジニア、クリエイターの方々も入ってもらって、この人たちが一緒にチームをつくるんですけれども、各ブロック8チームずつぐらいできています。なので、8ブロック8チームですから、64チームぐらいできていて、実際には67チーム。67のチームが、さっき言ったみたいに関係性を丁寧に丁寧につくって、8ブロックで同時進行で進めてきて、今、第7回まで終わったところです。ちなみに3月21日から25日まで秋葉原のアーツ千代田3331というところ、アートスペースに全国のブロックの人たちが集まって、展示会と発表会をやります。もしコミュニティデザインはどうやって進めているの？ ということに興味ある方がいたら、今月の21から25日までに秋葉原に立ち寄っていただければと思います。もちろん無料で、いろいろな人たちとリレートークをやるというのもあるんですけれども、この人たちが700人全国から集まってきて、自分たちの介護や福祉の未来をどう変えるかみたいなことを提案しています。4月からはそれを実践することになっています。介護施設の施設長とか意思決定権者が参加することが条件になっているので、やらない提案はだめということになっています。なので、4月以降は全国で67のチームが動き出すことになっているのですが、今、画面を見ていただいているとおりです。何かこのようなツールをつくったりするのもコミュニティデザイナーの仕事です。人々が何か楽しそうだなとか、かかわってみたいなのというようなことや、あ、わかりやすいなという説明や、こういうのは行政の職員にやりなさいと言ってもそんなに時間がないし、こんな些末なことばかりやっていると無理なので、そんなのは我々でお手伝いを

しているんです。

これがうちの事務所をすごく特徴づけていると思うんですけども、全国8ブロックでやると、事務所のスタッフは25人なのですが、二、三人ずつ分かれて担当のブロックをつくるんです。担当のブロックをつくっていて、その彼らが競い合うんです。絶対同じことをやりたくないの、さっき言ったとおりデザイナーの性として。だから、人々の意見を否定しないようにとか、デザイン志向で、バックキャストイングでとか、ワークショップでよく言わなければいけないことってあるじゃないですか。言ってもみんな忘れるじゃないですか。すぐ意見を否定したりするおっちゃんが出てきたりする。それを思い出すために何か意見を出すときには、はい、意見を否定しないでねと毎回言うのは嫌らしいから、手にとったペンのところに、意見を否定しないようにとか、バックキャストイングとか、イエスアンドとか書いてあるんです。これを張ったんです。これを中部ブロック、名古屋のチームがうちの内部のフェイスブックにアップしたんです。うちはこんな工夫をしてみましたと言ったら、みんながすごくいいアイデアじゃん。だからうちは絶対にやらないと決めたんです。このいいアイデア以上にやってやると言って、急に関西にいる連中が飲み物のコップにそれを張り始めたという、デザイン志向と。手にとった瞬間に全部思い出しちゃうということをやった、これをまたアップしたんです。そうしたら、これに「いいね」がいっぱいついて、絶対これやらないと。これとこれだけはやらない。だから、蝶ネクタイみたいなのところにそれを書いたり、ファシリテーターの顔を見たらすぐそのことを思い出したりとか、Tシャツを自腹で何かこんなのをつくってきちゃうチーム、これは関東です。東京のチームとか、北海道ブロックは風船にヘリウムガスを入れて、こうやって吊ってきてちょうど目線の高さに、そのキーワードがふわふわ浮いているというようなのをテーブルごとにつくっていくというようなことをやったりします。

だから、コミュニティデザイナーって基本的にはデザイナーですので、何かちょっとでもくすつと笑えるとか、人々が魅力的だなと思うことを常に開発し続けることが楽しいんですよね。それ見たかとか、どやこれ？ みたいに言いたい人たちが集まっています。コミュニティデザインって何？ と言われたときに、理性と感性のバランスを持っている人材のことだと思うんです。正しいだけでは人が動けないので、そこに楽しいという要素をどうやって入れ込めるか。そんなアイデアを持った人が住民の方々と一緒に話し合いをすると、とんでもないように見えるけれども、おもしろいプロジェクトみたいなのが幾つも生まれてきます。

67のアイデアのうちの1つがこれです。これは名古屋の地区です。瀬戸市という瀬戸物の地域の介護事業所とクリエイターたちと一緒に考えた「ソトバカフェ」というものらしいんですけども、お墓に卒塔婆って立っていますよね、こういう形をしたやつ。こういうのをマドラーにしてかき混ぜてカフェオーレを飲むらしいんですけども、このカフェオーレは骨壺に入っているみたいですね。「ソトバカフェ」というのをやって、デスクカフェってやつです。死に対してみんなでポジティブに明るく話し合うという機会がずっとないと、みんな突然死が来てしまうからいろいろな問題が起きると。だから、若いうちから死に関してもっといっぱいしゃべろうよというカフェをやりたいのですが、それを「ソトバカフェ」と呼んで、カフェでやらせてもらいたい。どこのカフェでやらせてもらいたいかわかりませんが、スタバですね。スタバとやりたいんです。スタバとやりたいからと言って、僕はスタバのリージョナルマネジャーの講習会の講師なので、一応スタバの偉いさんを紹介したんです。この瀬戸の人間とスタバとで、スターバックスで「ソトバカフェ」をやらせてくれと提案したら、丁重にお断りされました。なので、今、瀬戸市にある個人がやっているおしゃれなカフェのオーナーが理解があるので、そこでやる事が決まっています。もう二、三回やったそうですけれども、来年度4月からが本番です。毎週時間を決めて、そのカフェの中で「ソトバカフェ」をやるというふうに言っています。

もうこれで終わりにしますが、コミュニティデザイナーってイメージしていただくと、今のようなことです。何か政策をたくさん知っていたり、正しいことを言えるような人ももちろん大事なのですが、そこで地域の人が前のめりになってしまうとか、おもしろそうとか、くすっと笑えるみたいな要素を練り込みながら人々と話し合えば、これは一回やると、住民は調子に乗るんです。勝手におもしろいことをどんどんやっていってしまうんです。そうなったら、みんながこんなことをやっていいんだと気づいてくれれば、もう僕らはいなくてもいいだろうと思っています。

【小田切委員長】 どうもありがとうございます。

それでは、ほかに。

若菜さんが既に手が挙がっていましたので、お願いいたします。

【若菜委員】 場についてお聞きしたいんですけども、最初に角砂糖のような場というのはもうない。そうすると、今そのような、こういう関係を大切にするようなステージでの場の理想的なものというか、イメージを教えてくださいませんか。

【studio-L山崎代表】 ありがとうございます。もう本当に地域それぞれです。我々はその地域の人たちと話し合いながら、対流の場をつくっていくことが多くて、象徴的なのは千葉県の睦沢町でのワークショップのときでした。よくあるとおりです。ここは道路を拡幅するというプロジェクトの中で、拡幅した道路でどんな活動をしますかとみんなで話し合ったんです。チームが4つ生まれたんです。道路をただハードとして拡幅するだけではおもしろくないよねということになって、その道路を使う人たちが増える必要があるだろうということで、散歩チームが出てきたりとか、食事をつくるチームが出てきたり、子供の遊び場をつくったら、結果そこへ行くために道路を使うだろうというチームが出てきたりいろいろしたのですが、1つは対流の場です。コジャ、小さいお茶と書くのですが、この地域の方言で「小茶する」と言うと、お休みするということで、みんなで集まるんです。みんなで集まる場をつくるというプロジェクトチームが立ち上がったんです。

その人たちのうち1人が、親戚が魚屋をやっている、もう今はやっていると。天井が落ちてしまっているようなところだけでも、そこだったら無料で使っていいというのを聞きつけてきたので、そこをリノベーションして、「小茶クラブ」というクラブにしようと思ったんです。さっきケース・バイ・ケースだと言いましたけれども、うちの若い女性がまた1人スタッフをやっているのですが、リノベーションをしておしゃれ空間をつくれるんじゃないかなと思ったんです。こんなやつです。今は全国どこでもありますね。リノベーションと言えば、壁を白く塗れば大丈夫です。そこに観葉植物を置いておいたら大体おしゃれな空間ができますから。そんなのをつくろうと、ここでも思ったわけです。

我々もデザイナーですから、おしゃれだったら人がたくさん集まるだろうと思って、チームの中でいろいろ提案、話し合いを聞いていたんです。彼女がいろいろと、どんな空間にしたいですかみたいなことを聞いてみたんです。そうしたら開口一番、お父さんが壁に竹を張りつけようと言ったんです。竹を張りつけたらおしゃれ空間にならないです。これはまずいと思って、この人の意見は聞いたらいけないと思ったので、聞いてみました。「どう思いますか」と言ったら、「いいね」と言われたわけです。やばいと思ったんですよね。大体おっさんの意見を聞いていたらだめだろうと思って、女性の意見を聞かなきゃと思って、「お母さん、どうですか」と聞いたら、「私はフリルのカーテンがつけたい」と言われたんです。これはおしゃれ空間にならないですね。あ、だめだと。「我々デザイナーですので、デザインは任せてください」と言ったら、「まあ、任せるわ」と言っているんですけども、明らかに怒っているんですよ。

つまりケース・バイ・ケースだと言ったのは、おしゃれ空間をつくれればいいというものじゃないということです。でも、僕らは勘違いしているわけです。だから、おしゃれ空間ですね。とにかく若い衆も入れて、とにかくここを白く塗るということです。とりあえず白く塗っておけばいいんだ、おしゃれな感じになるだろう、とりあえず白く塗っておきたいなことでいろいろやってみたわけです。工事も含めてチームのメンバーと一緒にやる。プロが全部やったらだめだというのは、さっき言った関係、思考、結果までですから、みんなで作ったんですけれども、このテーブルでバーカウンターみたいなのをつくったんです。この辺とかも白で塗って、ここはちゃんと上を白で塗ろうと思って、こんな感じでつくっていて、僕らのうちのスタッフがお昼ごはんとかを食べにいて、のんびりしていたんです。帰ってきたらこんな屋根がついていたんです。これはおしゃれじゃないですよ。これだめだろうと思ったんですけれども、つけた本人はドヤ顔です。どうや、やったみたいないな感じで。これを取れともう言えないので、これはいいですと、わかりました。だけど、それは残すけれども、横壁はもうしようがない、これはそのままいくけれども白に塗るよと言って、白に塗ったんです。

それで大阪に戻ってきて、翌月行ってみたらその壁に竹が張られていたんです。もうだめですね。これはしようがない。いいよ、もう自由にやると言ったら、仲間がどんどん増えていって、一気に完成ですわ。その得体のしれない場所にガンガン人が来るんです。もっと言えばカオスですね。これは何だろうみたいなものがいっぱい置かれていて、神棚はお酒だらけになっているし、だけど「小茶クラブ」はいまだにすごいんです。ものすごく人が来るんです。だから、対流の場はこうあるべきだと僕らからももう言えないんです。そのプロセスの中で対流の場はどうあるべきなのかをみんなと発見するみたいなことをやらなければいけなくて、でも、これでは集まらない人種もいます。だから、どんな人たちに集まってもらいたいと思っているのかというようなことを、プロジェクトを推進しようと思っているチームと学びながら、共有しながら、それでおしゃれカフェのインテリアとかも学んだ上で、そうじゃないって決断するんだったらそっちを尊重しなければいけないので、いろいろな情報を学んで、本人たちとともに決めるというようなやり方をしていることが多いです。だから、対流空間はこれからどうなっていったらいいだろうという、全国に通用する一般解というのは僕はお答えできないんです。むしろ対流空間をどうつくっていいかというプロセスについては語ることがいっぱいあるなという、そんな感じなんです。

【小田切委員長】      ありがとうございます。

それでは、あと2問ぐらい。沼尾先生。

【沼尾委員】      貴重なお話ありがとうございます。今の質問ともかかわるんですけども、これがコミュニティデザイナーの役割なのか、役所というか行政職員なのかということですが、今のように出てきたアイデアを形にしていくときに、ある種、よその人たちともつながる対流の場にしようとするれば、さっきの竹だと多分だめですよ。けど、自分たちが居心地いい空間をつくらうと思えば、自分たちのルールである程度決めていく世界もあるだろうと。そういうときに対流の場というのが、むしろ内部でのつながりをつくっていくための場として機能していくことも大事だと思うんですけども、これから人口も減少していく中でいかによそと交流のある種拠点にするかとか、入り口にするかということを見ると、そこによその意見も入れていかなければいけないと。そのときにハードとか制度をどうつくるかとか、あるいは資金をどうするかというところも含めて、そのところの専門性みたいなものはコミュニティデザイナーの役割なのか、あるいはもっと行政職員がそこを見極めなければいけないのか、あるいは地元でそういう担い手を育成していきながら、そういう人たちが持っている専門性がある人たちを発見するのか、あるいは育てていく必要があるのか、そのある種社会資本とか、ローカルな社会資本というものの作り方について、何かお考えがあったら教えてください。

【studio-L山崎代表】      ありがとうございます。その3者のいずれも使いまくっていますね。だから、コミュニティデザイナー的に言うと、強いのは外部の人間も来たくなるような空間のデザインはどうあるべきか。さっきのベンチの置き方から、あるいはそういうフラット空間があったほうがいいのかとか、その下の収納はどうあったほうがいいのか。これは空間デザインを出自としている人間としては、テーブルの中から70センチなのか、71センチなのかで変わるみたいなどころはもちろんありますので、あるいは椅子の高さも40センチなのか38センチなのかで大分変わるという、そのスケールはそれぞれ持っていますから、コミュニティデザイナーとして空間について言えることというのはもちろんあります。もちろんあるんです。

それと、我々不動産にそんな強くないですけども、ある程度そういうファイナンシャルプランニングとか、この改修だったらどれぐらいかかって、断熱も含めてどんな感じになっていくかという説明をお金とともにすることまでぐらいはできます。ただ、その予算を補助金のメニューがどれぐらいあってとか、あるいは今回は自主財源でやったほう



が縛りがなくていいのかとかいうような判断は、僕らも経験上お話しできることはありませんが、役場の職員とか、地元の役場の人たちのほうが知っている場合もあります。なので、もし役場にそういうのに詳しい人がいたのだったら、むしろそっちの人にやってもらいますし、見つからなかったら僕らが知っている程度で住民と対話します。住民の中にむしろそこに長けている人間がいるんだったら、もうその人に任せてしまったほうがいいと。

ここの事例の場合はまさにあいている、ウオカツという魚屋が廃業した跡があって、不動産屋とかにも出していなくて、うちの親戚やという人がいたので、ほんなら交渉してくださいと言って、親戚に交渉してもらったら、貸してもええぞと。中をきれいにするんやったら、もちろんいいよと言ってくれたので、許可取れましたと。じゃ、金をどうすると言って役場に聞いてみたら、そういう補助金のメニューもあるけれども、でもやれることが縛られると。例えばそれを使ってつくって、民業圧迫になるようなお金もうけみたいなのはできないよと。そんなのやりたい？ と言ったら、今はやりたくないけれども将来やるかもしれないと。危険性もあるから、補助金を使わんほうがええかなみたいなことになって、実はここでは資金集めを本人たちがやったんです。それはすごく単純で、地域でイベントがあるたびにブースを1個借りて、ここでなぜかザンギとうどん。ザンギって北海道ですよ、あの唐揚げ。でも、本人たちにうまくつくれる人がいたんでしょね。甘味市場小茶クラブ飲食スペースというのをつくっては、これでどんどんお金を、イベントで物を売ることによって利益を出して行って、これで改修のための材料を買うんです。でも、職人に払うお金はないです。だから、材料を一通り買えるだけのお金をバザーとかイベント出店で何十万か資金がたまったら、もうホームセンターとかに行って買ってきて、適当にやったり、塗っちゃったりしていました。

だから、補助をとったほうがいいのか、そのメニューはどんなものがあるのか、厚生労働省系の補助がいいのか、国交省系の補助がいいのか、小さな拠点がいいのか、そんなのいろいろ知っている職員、僕らが言ってもいいし、でもその補助のいい点と悪い点が見極められた場合、使わないと判断する場合もあるし、ここは外部の人間を入れないということだったので、さっきのようなプロセスになりますが、おっしゃるようなもっと交流して刺激を受けるような、それでカフェをやって販売もして、ちょっとしたお金を出すことによって気分がいい時間を過ごせるみたいな方向を目指していくのだったら、どんなメニューやどんな空間のつくり方があるのか。それは先ほど挙げていただいた3者の中から、使える人を総動員するというのが我々のやっている実態です。

【小田切委員長】 それでは、あと1問だけ。それで、その後ぜひ事務局の皆さんから、あるいは関係省庁の皆さんからご質問をいただきたいと思います。数年前にある省庁でお話をいただいたときに、それを聞いていた非常に偉い方はそんなことで動くなら補助金は要らないだろうと大変驚かれて、ほとんど話を信じなかったということもありますので、省庁サイドからもぜひお聞きください。

こちらサイドから1問いかがでしょうか。よろしいですか。それでは……。

【studio-L山崎代表】 藤山さん、何か聞きたい。僕が尊敬している人の1人なので、藤山さんの前でしゃべるのは恐縮だなと思いつつ、何か感想でもいいですけども。

【藤山委員】 ずばり聞くと、いろいろ依頼があると思うのですが、こりゃだめだわと断りたくなる場合、失敗学で取り上げたくなるものはどんなケースでしょうか。

【studio-L山崎代表】 うちの事務所って変な事務所で……。

【藤山委員】 地域や行政について。

【studio-L山崎代表】 基本的には仕事を断らないんです。またこれ変な事務所、行政の仕事が大体9割ぐらいですけども、4月1日から新年度が始まると、25人のスタッフでできる仕事量って60地域しかだめだと決めているんです。それ以上になると、クオリティーがどんどん下がっていく気がしているので、年間60地域にしか応援できない。毎年3年間つき合いをするというふうに大体決めているんです。だめな場合もある。単年度で市長がかわったとか言って切られる場合もあるのですが、大体3年おつき合いするというのがデフォルトです。契約は大体単年度契約です。だからもう口約束で、来年もできますよねと言いつつ何とかつないでもらいますし、複数年度契約できるときもたまにあるんですけども、そんないろいろです。

つまり3年やるということは、60地域しか応援できないと、1年目、今かかわっている地域は20地域です。2年目も20、3年目も20です。だから、新しくお引き受けできる仕事は20地域しかないんです。うちの事務所はこれを先着順で受け付けているんです。なので、4月1日からスタートダッシュで発注してくれる行政は、値段が低くてもすぐ一緒にできるんです。こんな言うたらあかん、ネタばらしになるな。でも、値段が小さくても、新年度スタートダッシュしてくれたところはもう引き受けることにしているんです。これで60地域までいったら断り続けるという物すごく単純な事務所です。だから、値段の高さとかで決めていないのですが、ただ、たまたま大体9月ぐらいにいつもいっぱいになってしまうんです。10月以降のお引き受けができないのですが、1月とか2月ぐ

らいで予算が余ったから発注的な仕事は一切ないというのが、結果的に気分よく仕事ができていることにつながっているような気がしています。一緒に仕事をやる人たちがみんないつもやる気です。それは多分、早いうちから段取りを詰めて、前の年から議会の説得していたりして、予算をつけたりしているから、その勢いのある担当者と仕事ができているというのは幸せな点なんじゃないかなと思います。

だから裏を返すと、これはだめだなと、これはもう俺ら断りたくなるなと思うのは、そういう余った予算を執行してとか、業者でやってとか、契約書に書いてある甲と乙という文字を本気で信じている人とか、そういう人たちとはあまり仕事ができない。見てのとおりこんな生意気な人間ですので、首長と会おうが、大臣と会おうが、Tシャツと短パンで行くような人間です。でも、それもオーケーよねと言ってくれるような人たちと仕事ができているのは、何とか我々がやらせてもらえている理由なんじゃないかなという気もしています。

【小田切委員長】      ありがとうございます。

それでは、事務局から、国交省サイドからいかがでしょうか。特別にないですか。よろしいですか。

それでは、議論の中で参加していただきたいと思います。山崎代表、ありがとうございます。ひょっとして12時20分までおつきあいいただける……。

【studio-L山崎代表】      もちろん。

【小田切委員長】      よろしいですか。どうもありがとうございます。

それでは、ぜひ議論に参加していただくような形でお願いしたいと思います。

それでは、先ほどご説明いただきました2019年とりまとめ案についてご議論をいただきたいと思います。既にご説明がありましたように、前回までの議論と大きく変わったところが1カ所あります。例の何ページでしたっけ。

【小路企画専門官】      12ページです。

【小田切委員長】      12ページですか。ありがとうございます。機能という議論をしていたのですが、「人」、「場」、「仕組み」という形にして、そこでの議論を明確化したというのが大変大きな違いでしょうか。その他大分変わったところもありますが、基本的にここが大きく変わったところとお考えいただきたいと思います。

さて、それではこの内容についてご自由にご発言いただきたいと思います。これはおそらく藤山先生が既にご準備されているんじゃないかと……よろしいですか。

【藤山委員】 いいです。だんだん委員会で打順も決まってきたのかなと思いますが、まずは墨に出たいと思いますけれども、今日の議論はこの2019年とりまとめにかなりダイレクトにつながる話題じゃなければいけないと思うんです。今後の展開を除いて、はじめから2の新たなコミュニティ、3の新しい内発的発展というので4つほどありまして、1つがテーマ設定の背景でいろいろ書いてあるのですが、ぜひこれは広井先生も折に触れてよく言われることですが、1つは我々、必ず循環型社会に向かわないといけない。そうでないと持続可能になりませんから。もう一つは人生100年時代ということです。こういう大きな、本当は構造的での、文明的な変化があるという基本認識が重要と考えます。それを書いた上で、だったら何が「住み続けられる国土」をやっている意味があるのかというと、結局、そういう循環型社会にしても人生100年時代にしても、競争社会だけでは、あるいは競争原理だけではもたないということが問題意識としてあると思うんです。いかに競争社会の中に共生社会を創出するのか、あるいは守るのかといったことが、本当は我々が今コミュニティを議論している意味じゃないかなということが、この背景の中で1つ考えてもいいんじゃないかなと思っています。

そういう意味では、コミュニティは何なんかと言うと、一種のそういう共生社会として生きる基本ユニットに相当するものだと思います。ちょうど我々の体が全部細胞という基本ユニットでできているようなものです。物質の流れ方も、細胞の中の振る舞いと、細胞の外の振る舞いは全く違うんです。そうした共生社会としてのユニットを本当はちゃんとつくっていくんだよという背景説明があってもいいのではないかなと思います。競争社会における共生社会のユニットとして、一定のエリアと核があり、それは本当に「小さな拠点」が相当し、拠点とネットワークの基本セットが基本ユニットの中にそろわなければいけない。本当はそういう新しい地域社会の設計原理を考える必要もあることが、2番目に言いたいことになります。

3番目は、ただ「小さな拠点」だけあればいいというわけじゃなくて、細胞の中にもいろいろミトコンドリアとかリボソームとかいろいろな役割の、いろいろ多機能な団体とか活動があるわけです。それが非常に重要でして、私も田舎の集落へ住んで、ここで30年後に死ぬと思います。結局何が大切かというと、面倒くさいけれども、損得抜き活動ほどみんなを結びつけるものはないんです。例えば宮仕事とか草刈りみたいなものです。それが人口診断の次は、地元関係図といってちょうど書いたら細胞内の構造図みたいになるのですが、「小さな拠点」があり、自主組織あり、事業組織あり、小学校ありとか、全部そ

この団体や活動を落とし込むと本当に細胞の内部構造そっくりになるんです。でも、そういう目で本当は先ほどあったような目的やコミュニティ、サークルとか、そういうソーシャルキャピタルを醸成するような内部構造が実はすごく幸せに暮らす上で効いているんです。そうしたことも改めて確認しないとイケない。これはもうかなり書き込まれていると思います。

それから、3番目は結局、きれいごとじゃなくて、さっき共生社会と言いましたが、今度はファイナンスの問題になります。これに必要な費用をどうやって捻出するのか。はっきり言ったら、小さなコミュニティはいい意味で本当にペイしなければいけないんです。ただ、これについては今、私は介護の費用分析を徹底的にやっていますが、ソーシャルキャピタルを醸成するような地域づくりをやればやるほど、みんなが元気に、お達者になって、介護や医療費が大きく減るという傾向が、調べれば調べるほどどんどん明確になっています。そうした「連結決算」を分野横断してやると。それまで収益と関係がないと思われた地域づくり活動がすごく便益をもたらすわけです。こういった地域ぐるみの連結決算つまり分野を横断したファイナンスが本当はちゃんと論じられないと、現実感がないと言われかねない。本当はそれがすごく現実起こっていることです。

次、4番目になります。ただ、収益というのを今までは競争社会で極めて短期的に損得で、四半期ごとぐらいで勝負してきています。でも、それでは、地域社会はもたないんです。何が言いたいか、4番目は山崎さんがまさに最初に言われて、私もそのとおりだと思ったんですけども、時間軸です。田舎に住んでいるとわかりますが、我々は四半期ではなくて、四半世紀以上の時間軸で生きているわけです。そうした長い目で未来につながるかどうか非常に重要でして、今の便益というのも。人生100年時代において、老後のケアあるいは子育てみたいな短期的な損得抜きでやるべきことが本当は評価されなければいけない。いや、これから始まるいろいろなエネルギーへの投資、新しい交通システム、シェアリングの投資も、1年や3年だと個々ばらばらにやっていたら収益を生みません。でも、20年、30年考えると、必ずペイするんです。集落営農が個々にばらばらで高額なトラクターを買いまくっているのではなくて～せつかく去年買ったのにみたいな人もいますよ～でも、長い目で見ると共同化すれば必ず本当はみんなで収益が見えてくる。そうした長期的にカウントできるための関係性であり、その中は単純な競争原理ではなくて、長い目で見て共生していくような、そうした価値判断が本当は必要だと思います。ちなみに私はそういった長期的投資は、もちろん金目で金額ベースでも合うんです。ただ、

地域社会における本当は最大の報酬は記憶ですね。そのときそのとき、今だけ自分だけお金がなくて頑張った人の努力が記憶によって刻まれて、紡がれて、共有されるのが、本当はコミュニティの本質じゃないかなと。今そういうところに、田園回帰にしても、そういうのが共有できる記憶も、共有できる手応えのあるコミュニティに田園回帰しているというのが、私が全国を歩いての実感です。

以上のようなところを少しやっていただくと、今の時代背景から、しかもそれが実際にちゃんと持続可能な地域経営も含めて見えてくるというあたりで、今年の委員会の議論の本当に大切なところがより引き立つのではないかなと感じています。

以上です。

**【小田切委員長】** いずれも印象的なことをおっしゃっていただきました。中でも特にコミュニティの本質という議論は非常に印象的です。このコミュニティの本質の議論はどこかで書いていただいてもよろしいかもしれませんね。コミュニティの構造、コミュニティの変遷などが書かれている10ページ、11ページのあたりにコミュニティの本質とは何なのかということを書いていただく必要があるかもしれません。ご検討いただきたいと思います。

さて、ほかにはいかがでしょうか。

順番に全員から聞きましょうか。では、若菜さん、玉沖さん。

**【若菜委員】** 私は1点だけですが、資料の1-1の12ページで3つの要素を整理いただいているんですけども、山崎さんからもいろいろお話があったように、コミュニティをさらに、ここはコミュニティの創造のところですが、内発的とか対流も含めて、時間も重要だよというところをこの3つの要素に入れないと、何かまた同じ失敗と言ったらあれですけども、繰り返してしまうかなと。要素の中にこの時間軸のようなものも必要だというのはぜひ書き込んでいただけるといいなと思います。それが多分、この後で出てくるプロセスがそういう役割だと、そういう意味が含まれていると思うんですけども、ここに表現するのもありかなと思いました。

**【小田切委員長】** ありがとうございます。この報告書の特徴は、今言っていたようにプロセスを重視する。それはまさに時間軸を重視するということからスタートしております。時間というのはコストではなく、むしろ将来に向けた投資だということですね。そういったことをみんなで共有化しながら、プロセスデザインが重要だということで最後に出ておりますので、それがもっとわかるようにというご注文だったと思います。まさに

今日の山崎代表の議論とも重なりますので、さらに強調したほうがよろしいかと思っておりますので、ご検討をお願いいたします。

それでは、玉沖さん。

【玉沖委員】 ありがとうございます。私からは2点ですけれども、まず1点目が対流というものの位置づけ。これは事前のご説明のときにもお聞きして、ん？と思ったんですけれども、そういえば対流が促進されることが期待されるというのが1ページの17行目に書かれていますが、そもそもそこが大目標だったのかもしれないのですが、熱い議論を重ねていくうちに、そこが少し飛んでしまっていたかなという印象がありまして、この位置づけだったり、3年のまとめのときとのつながり方や位置関係、ここは少し丁寧な議論をしたほうがいいかなと思っております。今だと唐突感があるので、最終的に対流ということが飲み込めて、最後の締めにも、だからという対流とのつながるのだと位置づけを考えたいなというのが1つです。

もう一つが52ページ、最終ページの4-2の将来に向けた検討課題、これはもしかしたら3年間のまとめかもしれないというご説明をいただきましたが、私もそう思います。この3年をまとめるときに例示も出していただいていますけれども、今、議論にあったコストではない時間の話もそうですが、逆に時間というコストであったり、あと私は個人的に、山崎先生のお話にも「人」のお話がありましたが、役場の方が入られてというときに時間がかかるとなると、人件費というコストの側面もきっとあると思うんです。地域づくりに取り組んでいるときに、予算を申請するときに人件費が認められないとか、誰か手伝ってもらいたいときに謝金を払いたいのに、謝金は認められないというルールが最近厳しくなっています。そのルールを変えたいわけではないのですが、人件費というコスト、それが藤山先生も先ほどおっしゃられた地域経営という、コストという位置づけや考え方を3年のまとめの中で少し触れたいなと思っております。

地域づくりがテーマに入っていると、住民の活動が活発になる前に、我々はもうけたいわけじゃない、維持したいんだ、だからこれに参加したいんだとおっしゃる方がよくいらっしゃるんですけれども、継続するためには何らかのコストが必要で、それは補助金で調達するのか、自分たちで稼ぐのかさまざまですが、維持するためには時間なのか、人なのか、もう実際に活動費というお金なのか、何らかのコストがかかる。もしかしたらそれがここにあるシェアリングエコノミーなのか、地域経営なのか、どこかかかわってくるところがあると思っておりますので、それは3年のまとめのところの例の1つになるのかもしれないませ

んが、経営やコストということにも触れておきたいと思います。

以上です。

【小田切委員長】 ありがとうございます。おそらく後者のお話は、高橋委員からも出てくるような話ではないかと思います。前者の対流促進型国土とこの検討とのかかわり合いをもうちょっと丁寧に書いたほうがいいのではないかという議論がございました。おそらく3年のとりまとめの骨子のところで、そういったことが必要になってくるんだろうと思いますが、どうでしょうか。今回用意していただいたポンチ絵について、これは何かご説明をいただきますか。

【小路企画専門官】 もう一度、資料2-2の1枚目をごらんいただきますと、今年度議論してきたコミュニティと内発的発展というものが、繰り返しのよう話になりますけれども、今までの地域型コミュニティではなくて、また違う、外からの人もつながった新しい価値観につながって出てくるコミュニティが、結局、活動人口、交流人口とかの拡大につながって行って、それが外の人とのつながりという中で対流が促進されるということ。あと、メカニズムの3つ目の丸で書いてあるとおり、外部アクターがつながることによって、内発的発展が外部アクターによる対流とか、そうした人だけではなくて、モノ、情報などの対流とかにもつながっていくというのが、今年度議論してきたところの対流とつながる議論だと思っていまして、それを図化したのが下の図になると思っています。

次のページが、その要素として必要なものとして3つ整理させていただいているもので、まず人材というのが中にもいるし、外から対流を起こすためにも必要であろうということ。外と中をつなぐためには、昨年度議論いたしましたつながりサポート機能というようなものがあって、初めて外部と内部のつながりが促進されるということ。それも人と人がつながる、内部だけのこともあるでしょうが、外部と内部とのつながりにおいても、つながりをつくるための場ということで、ここではコミュニティ創造拠点と書いていますけれども、そういうものが必要なのではないかと整理しているところでございます。

【小田切委員長】 こういうふうになっております。親委員会でもこのことが議論されると聞いております。こういったところをもっと丁寧に書き込むということが必要でしょうか。

【玉沖委員】 そうですね。

【小田切委員長】 どうもありがとうございました。

それでは、高橋委員、お願いします。



【高橋委員】 ありがとうございます。自分自身も今回もこれに参加させていただいて、本当に勉強になりました。

今、委員長からお話もありましたが、経済的などところで、例えばこの資料の25ページにあるようなところでも、「企業」というような表現を何カ所かでしていただいている、特に地方に行けば行くほど、今、日本全体で中小企業の数が減っている中で、358万あると言われる日本の企業のうち99.7%が中小企業だとすると、ほとんどが中小企業で、それが地方の一定程度の企業が中核企業として地域経済を担って支えているような、地域の農産物を加工して、日本全国、世界に売っていくような、お金を稼ぐような役割を果たしているんだと思うんです。

そこにも実は今かなり喫緊の問題があって、何かの折にお話ししたことがあると思いますけれども、今後の取り上げ方の中に入れていただくとありがたいなと思ったのは、その358万の社長さん方の68%、245万人が、あとたった6年で70歳に到達してしまうという大定年中小企業事業承継時代を迎えてしまって、もしここがうまくできなければ、日本の雇用の7割を支えているのも中小企業ですので、これが地方の経済と本当にリンクしていることが明らかですし、このつなぎ方をどうするか。そのときに今回議論したような、必ずしも私は株式会社の形でつないでいくことや、無理やり事業承継を親族内とかでやる必要はなくて、新しい担い手の方々がそれを地域の事業として引き継いでいくことがもしできれば、私はNPOだろうと、ソーシャルビジネスだろうと、シェアリングエコノミー、何の形でもいいから、地域にふさわしい担い手さえできれば、企業の形態にはこだわらないほうがいいんじゃないかと思っています。ただ、こここのところは早目に手をつけていかないと、あとたった6年で68%ですから、とてつもない数の社長さん方が70歳を迎えてしまうというところが1つある。

これが最後にいただいています将来に向けた検討課題の中で例として挙げられている、どこまで今後この将来に向けた議論、検討されるかは別として、例の1番目に大都市における高齢化への対応と載っているんですけども、これはもう大都市になるとまた別の意味でもっと顕著で、そういう大量の失業者が出るような可能性だって7割の雇用を支えていると、中小企業がなくなってしまうことで迎えてしまうという問題が1つあるのと、同時に都市が抱える問題としてもう一つは、25ページにありますような、これまで企業に勤めていた方々が定年を迎える、これも同時期にやってまいりますけれども、引退すると。そうした方々をどう活用していくかということが新しい考え方で、地域の担い手にまたも

う一度デビューしていただくようなイメージで大都市もとらまえていかないと、先ほど先生がおっしゃいましたけれども、そういう方々みんな介護保険のお世話になってしまうと保険制度ももたないですし、またそういう方々が町じゅうをうろろう歩いて、ゾンビみたいな町になってしまうのもよくないと。それは元気なまま何とかもう一度、60歳、65歳で地域に再デビューするような、これも大量にそういう方々が来る。そのときのお仕事や働き方、1つのやり方が、今回皆さんで議論いただいた「住み続けられる国土」を担っていく、むしろ地域の、都市においた資源みたいな、そういう方々が45年間社会の第一線で働いてきた経験や人脈、ノウハウを社会でレンタルしていたんじゃないかなと僕なんかは思っていて、ようやく45年待って、地域に返してもらうんだと。返してもらったものをそこから生かしていくのが、むしろ45年間の社会人生活は予選だったんだと、ここからが本番ですよということで、大きな担い手になっていただくことが、地域としても維持していく1つなのかなと。もしかするとこんなこと、今後の大都市における問題が1つ課題かなと思っていました。

ありがとうございました。

【小田切委員長】 どうもありがとうございました。特に前半の話は、この議論で弱いところですので、何らかの形で書き込む。あるいはほかの委員会とのつながりもありますので、ほかの委員会とのつながりを強調するという必要かもしれません。

さて、それでは沼尾先生、よろしいですか。

【沼尾委員】 今の高橋委員のお話とも少し重なるんですけども、そもそもある場にコミュニティがあり、そこで暮らしが成り立っていることを考えたときに、さっきのソーシャルキャピタルではないのですが、そこに自然環境があって、風土があって、暮らしがあって、そこで暮らしたり、何かつくったり、稼ぐために必要な技術というものがあって、そういう環境の中でさまざまなタイプの技術を携えた人がそこで暮らしを営んでいると思うんです。技術そのものの伝承とか継承というものが、そのコミュニティに住み続けていくためにはまず前提として必要です。したがって、そのコミュニティが成り立っていくために、そこにある技術も含めたソーシャルキャピタルというものを次の世代につないでいくための場とか関係をどうつくるかというところが大事なのではないかと。その前提がもう少し書き込まれるといいのかなと思いました。

あとは先ほどの山崎さんのお話を伺っていても感じたことですが、そういうものをそれぞれが個々に持っていて暮らしていたんだけれども、ここがもうつながらなくなっている

とか、これとあれがつながると新しい関係が生まれるというところをうまく、集まったりしながら何か生まれるような場をどうつくっていくかという話がここでのメインだと思うんです。そういったものをもう一回関係を取り結び直したり、ある人が持っているわざを域外の人にうまく翻訳することで新たな利用可能性をつないでいくというようなところをどうつくっていくかというときに、地域の人たちが主体的に動くことも大事だけれども、それを事業や施策として外部のコミュニティデザイナーの方とか、あるいは住民の人たちとうまくつないでいくような行政、自治体職員の資質がすごく問われてきていて、そういうことがうまくその職員研修だったり、人材育成のプログラムとして入ってくるということがとても大事かなと。これは政策のあり方ですけども、そういうところにうまく予算なり、事業が展開していくといいのかなという印象を持ちました。

以上です。

**【小田切委員長】** ありがとうございます。これは新しい議論だろうと思います。

後で山崎さんにもお話を聞いてみたいと思いますが、生活技術とか「わざ」という言葉をお使いになりましたが、わざということで議論が始まっているところです。その継承の場を、作業技術の継承というのはそれなりに意識されているのですが、暮らしに近いところの技術の継承というのが実は大問題になっているんです。そういう議論があります。多分、これは現場からそういう話が出てきて、コミュニティデザインの活動の中でもあろうかと思いますが、少しコメントをいただけますか。

**【studio-L山崎代表】** そうですね。すごくいっぱいそういう声があります。それで、実際に技術だったり、生活をどうすればいいのかわからなくなっている集落というのも結構多いです。だから、今の前半のお話と後半のお話は両方すごく同意する点です。つまり、前半どうやって生活の技術を継承していくのかということと、あと役場の職員の役割です。そのときに全てを自分が解決しなければいけないと思ったり、あるいは外部でそれを解決してくれるスーパーマンの人を呼んだりしなければいけないと思ったりするだけではなくて、知識はもう現場にあると。だけど、それがどんどんなくなっているのだから、これをつないで継承していくような役割、今、コミュニティデザイナーと言っていましたけれども、そういう人を呼んでくるというアイデアが浮かぶかどうかとか、あるいはそういう人が自分に何か教えてくれれば、役場の職員がそこへ行って技術を継承できるようになるという研修のようなことはあったほうがいいだろうなと思います。

徳島県のつるぎ町というところで総合計画をつくるお手伝いをしたことがあるんですけど

れども、3つが合併した町です。ただ、行ったことのある方もいらっしゃるかもしれませんが、すごく山が深いところです。この一番下にあるところがこの町で言うグランドレベルだとすると、上に、こういうところに集落があって、急峻なところに集落がへばりついている感じですので、40度のところに、徳島にはこういうところがあるんですけどね。その結果、123が山間部の集落ですけども、ここも職員研修をやって、職員の方々にそれぞれ123を全部回りなさいと。「もしつるぎ町が消滅したら」というところから始めたんですけども、消滅可能性自治体で結構トップにあったので、仕事がなくなったら何の仕事をする？と言ったら、居酒屋をやるとか、卓球場をやりたいとか言うんです。事業計画書を出させて、全部でお金がどれぐらいかかるか、借入れどれぐらいになって、どれぐらいで返済するのかとか、それぞれ購入したやつは償却期間はどれぐらいで設定しているのかみたいなのをやったら、みんな全然もたないんです。役場の職員だからですけどね。そんな卓球グッズ販売で生きていけるのかみたいなことですよ。だけど、まず危機感を持ってもらうことと、事業に関するちょっとした知識は持ってもらいたかったので、そんなことをやって、役場は潰れてもらったら困るよね。あんたたち頑張らなきゃいけないよねと言って、それぞれの山間部に入っていってもらいました。

ここは前段ですけども、飛ばしてしまいます。山の中に彼が入っていきました。現状を聞きました。そこでの生活の取組とか、すごく重要な技術を持っているということがわかって、結局これは何をやったか。総合計画の別冊をやったんですけども、80人以上いる集落が集落機能としてできているものと、それから20人から80人までできていることと、20人以下になったときでは、集落123を回ると大分傾向が違うことがわかってきたのですが、役場の職員が123を全部調べて、話し合ってみんなでやった結果、そういう本をつくっておこうと。山暮らしの実態って、これは何を言っているかというところ、どこかに図があったかな、これだ。例えば100人いる集落は10年後に60人になって、15年後に20人になるという集落があるとすると、それは今60人の集落がとても参考になるよねと。今60人の集落が10年後に20人になるんだったら、今20人の集落の生活の知識ってすごく参考になるねと。だから、20から80人の集落の困りごととか、その解決策みたいなやつをまとめておいたら、将来20から80人になる集落が事前に勉強しておくことができるとか、20人以下の集落の困りごとのページには、またこんなことに取り組んでいる集落があるよと言ったら、将来そこに近づいているところは、もう山に登ってその集落に教を請いにいけばいいわけですよ。

だから、もう集落に英知があるし、少なくなる間に否応なくガソリン代だけみんなで出し合って、買い物とかでも、何か軽トラで送り迎えしているとかいうようなのを集落の中でやっている人たちがあつたりするので、そうか、その人数までいったらそういうやり方をするのかとか、もちろん最近発明したことではなくて、昔から引き継がれているようなことの中にもヒントがあつたり、使えなくなったものもあるわけです。将来自分たちがこんな集落になりそうだなと思うヒントの集落が町の中にお手本がもう結構あるので、そこをどうやってつないでいくとか、住民がそれを知りたくなるような気持ちになる。そこをどうやって醸成するのかというようなことを役場の職員ができれば、このあたりはうまく進むんじゃないかなと思いました。

なので、さっき厚生労働省のデザインスクールの話をしましたけれども、あのデザインスクールの全国中山間役場職員向けみたいなやつがあつてもいいかもしれないです。北海道から九州ブロックまで、人々が、お、魅力的だなと思うような進め方をどうしたらいいのかというのを考えるスクールがあつてもいいかなという気がしました。

**【小田切委員長】** どうもありがとうございます。まさに横から学ぶという発想ですね。新しい発想をいただきました。ありがとうございます。

それでは、松永先生、お願いいたします。

**【松永委員】** 到底まとめ切れる話ではないと思うんですけども、今回、キーワードになっている人とか対流とかではなくて、むしろ今日の山崎さんのお話を通してでも、何かキーワードになるのかなと思ったのが、27ページぐらい以降書かれている、時間とかライフデザイン、マルチステージ型の100年時代ということです。これまで、人の生き方というのは、地域政策と絡めて今まで全然論じられてこなかった。だけど、人口減少時代に入り、地域というのは人々の生活の器という認識が高まってきました。先ほどの山崎さんのスライドで目から鱗が落ちたのは、0歳から100歳ぐらいまでにどの政策がマッチしているか、マッピングされていたことです。ああ、そうかと。地域政策の基本の理念は元はと言えば個人がその地域に属することによって、どれだけ豊かに生きていけるかということだと思えます。今回、これが新しいトピックのようにして入っているけれども、むしろ足元を気づかされているのかなと思いました。

ライフデザインという言葉は新しい言葉だと思いますけれども、キーワードとして入れていいのではないかなと思いました。コミュニティもデザインだし、デザインという言葉が多用されているけれども、ライフデザインということを何かキーワード的に入れられる

んじゃないかなと今日お話を聞いて思ったんです。というのは、対流という言葉もこれまでの議論のように、交流とか観光とか、あるいは単に定住ではなくて、その地域に行くということは自分のライフとかキャリアを一回チェンジしていくことを含んでいます。その地域で新しい働き方を模索したような田園回帰層とか、フリーランスの仕事や柔軟な働き方をどうつくっていくかということとかなりリンクしていると思います。そうした個人のライフデザインと地域への対流は共に関係してします。だから、ライフデザインと地域という視点が今回の報告書で出ている目新しさだと思いますし、それをもう少し強制的なキーワード的に入れてもいいのかなと思いました。

それともう一つ、今回、新しい内発的発展というのがキーワードになっていますが、内発的発展というのはすごくソフトで、もちろんリベラルなイメージがあるわけです。だから、あらゆる人口、住民を包含しているイメージがあるんだけど、一方で関係人口とか、覚醒した人たちにクローズアップされていて、気になるのはその線引きです。たとえば、26ページに書いてある図で、覚醒した後に顔がキラリと変わっていますけれども、多分、星が人口で、白い星が低活動人口と記され、赤い星が活性化した人口というふうに分けられているというのが、これはなんだか奇妙な感じがします。低活動人口が赤に変わっていくことがいいのかどうかという議論もあると思いますが、むしろ声を出せない人とか、思っていることを自由に表現できない人も当然いるわけですよね。それがむしろ多数派です。そうした人たちも自然と間接的に地域の恩恵を受けていけるような形の図にしたほうがいいんじゃないかなと思いました。そう考えると、対流という言葉や新しい内発的発展は一方向の捉え方ではなく、活動人口だけ、関係人口だけをあらわすのではなく、多様性を含んで豊饒化していくイメージです。だから白い人口、低活動人口というところの言葉はなくした方がいいんじゃないかなと思いました。そういう意味で、ライフデザインというのは全ての人を包含した地域政策のキーワードになり得ると思います。

【小田切委員長】 非常に大きな問題提起をいただきました。ライフスタイルとかライフステージという言葉はしばしば使われますが、むしろライフデザインではないかというその多様性を考えると、デザインできるといったスタンスを明確にする。ひょっとしたらライフデザイン型国土形成なんていうのが次の国土形成計画で議論の対象になるかもしれないと、そんな直感さえ持ちました。今回の中でどういうふうに入れていくのか、ライフデザインという言葉でここで明確に打ち出すのがいいのか、あるいはもう少し温めるのがいいのか、このあたりの判断は少しお任せいただきたいと思います。ぜひそれは事務局の

皆さんと、あるいは親委員会とも議論させていただければと思います。

さて、一通りご意見をいただきました。事務局から特別なプライはありますか。

【小路企画専門官】 いえ、特に。

【小田切委員長】 特によろしいですか。

それでは、最後に一、二個お話をいただいて閉じていきたいと思いますが、どうしてもお話ししたい方、お二人はもう顔が語っていますね。藤山先生、若菜さん。

【若菜委員】 私は資料2-1と2-2はこれからやるのかなと思って、さっきしゃべり忘れてしまったので、気づいたこと。資料2-1、これは次回内容を深めて出てくるということですが、対流が急に突然でということだったのですが、本当に今回、山崎さんのお話を聞いて、対流というのは新しい関係を結ぶという縁結びみたいなことだろうなど。国交省さんが対流と言うと、何かこう洗濯機でぐるぐるかき混ぜるような感じがするんじゃないかと。そうじゃなくて、縁をどんどんつないでいくということだなということで、私はそういう理解をしてじっくりしたところです。

これは資料1が言葉になっていて、絵にしたのが資料2-2の2ページ目だと思うのですが、ここがまだまだだなど思っていて、1つ気に入らないのが、気に入らないと言ったらあれですけども、結んでいるのが車なのですが、え、今どきもう車だけじゃないでしょうという。クラウド的なコミュニティというか、そういうものもあって、別に行かなくてもつながれるというところが言いたい部分だと思うので、そういうのを加えていただきたいのと、あと最初から私も、場で拠点だと、これは絶対つながりコミュニティサポートセンターをつくっちゃえみたいな感じになって、先ほど山崎さんにも聞いたんですけども、この場は自分たちがつくった時間であり、空間であるということがすごく重要なので、つくったらだめです。私たちとしては寝床は欲しいですけども、多分そういうことじゃないので、私は「拠点」という言葉はもう取ってしまってもいいのかなというのと、この場が別に地域内で1カ所じゃないしということで、資料2-1の6で具体的な施策を書きいただいている、(2)の場づくりでコミュニティ創造拠点の整備と書いてあるんですけども、例えば今は地方でも空き家とか空き地とかいろいろあって、これは寄附して若い人に使ってもらいたいんだけどもみみたいな人たちもいて、何かそういう、できるなら固定資産をもうちょっと流動化して、自由に使って、どうぞみみたいな施策に落とし込むとしたら、そのような施策もぜひもっともっと進めていかないと、使えない空き家、空き地ばかりで、やりたくてもやれないところもあるので、ぜひそういう施策を入れられないかな

というのがそれでございます。

その点でいいです。あとはまた次回。

【小田切委員長】 ありがとうございます。今の場の点についてはコミュニティ創造手づくり拠点とか、少し何か形容詞を入れてもいいかもしれませんね。ありがとうございます。

それでは、藤山先生、お願いいたします。それで、最後に今の藤山先生の発言で締めてみたいと思いますが、山崎代表から何かありましたら、最後にコメントをいただければ。

【studio-L山崎代表】 はい。

【小田切委員長】 では、藤山先生、お願いします。

【藤山委員】 今回のとりまとめの後半の内発的發展を支える様々な拠点・空間ネットワーク、特にポイントはこの図ですよ。これだけ言っておきたいのは、これはここだけで起きていることではなくて、全国のこういった地元というかコミュニティが中山間地で大体1万ぐらいのオーダーがあると思うんです。1,500人ぐらいで。これが同時に起きるのがすごく大切。何が言いたいかというと、同時多発的な共進化、共に進化するというネットワーク化を我々が本当はやらなければいけない。これが一斉に本当は展開しているはず。そういった仕組みをつくるのがすごく重要なこと。

そのためには何が必要かということ、今、実はどこで何が起きているかの診断がされていません。こういう小さなコミュニティ自体の人口しかり、介護しかり、本当はできるんですよ。それをやっていないと、あそこはいち早く次の世代を取り戻しているから事業継承をやっているとか、あるいは介護がすごくみんな元気だとか、そういうのがあった上で、だったらそれは何が起きているのかということで学び合いが始まります。内発的發展というのは、まさにここのDNAが進化することにほかならないんです。でも、ここで起きたDNAの進化が、そこで孤軍奮闘に終わらせずにちゃんとお互いに伝播していくような仕組みとそのための共有化に向けた診断も必要ですし、それをつないで、ちょうどウイルスが介在して本当はDNAも変わっていくことがわかっていたのですが、そういったネットワークが必要かなと考えます。であれば、先ほどの山崎さんの話じゃないけれども、ここでちゃんと脈をとる人が必要です。これをちゃんと見つめていく、進化の脈をとっていくと。しかもそれを共有するような現場のスタッフと役場の職員が本当は必要かなと。

あとはもう一つ、今後の議論については、この細胞の中というのは、本当は振る舞いを変えなければいけないはず。共生社会なら共生社会、例えばいろいろな交通にしても、



エネルギーにしても、介護にしても、全国一律の規制で物すごくがんじがらめになっています。細胞に相当する基本的なコミュニティの中に、コミュニティナースとか、もっと自由な、小さな力を生かす発想がすごく必要だなと思うんです。そうしたところが今度の制度設計的にもすごく重要な議論になるんじゃないかなという感じがしています。

【小田切委員長】      ありがとうございます。今おっしゃったのは、まさに対流促進型国土形成のプロセスデザイン、それ自体をどのように起こしていくのかという、この後になります。それをもっと我々は真剣に考えなくてはいけないかという問題提起をいただいたのかなと。

【藤山委員】      マス・ローカリズムというのが実はそういうことだということで、もう書いてあるので、それにそういったのを入れ込んでいただければ。

【小田切委員長】      ありがとうございました。

それでは、最後に山崎さんから一言だけコメントをいただければと思います。

【studio-L山崎代表】      もう後はどうなるか、つけ足せたらつけ足してくださいぐらいの図を幾つかだけお見せします。これは今言ったようなことですかね、手づくりでつくっている図ですからよくわからないですけれども、地域の人たち同士で話し合って何かを決めていくとやれば、それぞれの個人の主体性ってすごくでかくて、学ばないとできないことだらけなので、地域の課題解決をするためにそれぞれがちゃんと学ぶ。その学びも協力しないとできないことだらけなので、協力してつながりも強くなる。先ほど藤山さんがおっしゃったみたいに、地域の無償の活動こそ、つながりや記憶に大切になっているというのはそうですね。費用は自分たちでやりますから少なくなくて済むけれども、時間はすごくかかる。でも、専門家なる者が地域の中からそれが得意な人が出てくると、その得意な人に任せればいいんだけど、それぞれの人の主体性や学びは小さくなってきてとか。さらに外部の専門家がかかわって、その人が全部やっちゃおうとかいうことになったら、本人たちが協力しなくてもできるけれども、お金はたくさんかけなければいけないと、時間は短時間で済むよというようなこととか、これは何か外部が入ってきて、みんなで話し合いながら、応援団もいてみたいな細かいことになっているんですけどね。そうなるかどうかという。だから、自分たちでやることと外部の人たちがそれを手伝ってあげるこの関係をほかの要素も含めて考えたら、トータルコストというものはトリプルボトムラインみたいな感じで、いろいろな点でいいか悪いかを判断しなければいけなくて、見えていないところで減じていることがあるかもしれない。だから、誰かに任せてしまえばいいと

いう話でもないけれども、自分たちだけでやればいいというわけでもないみたいなのところが、1つ大切になってくるのかなと思いました。

あと1つは、計画と地域づくりをどうやって関係させていくかということです。仕事で計画立案というと、こういう計画をつくりましょう、専門家を呼んできて、それぞれのパーツをお金払ってつくってもらって、あれを完成させましょうみたいなことになるわけですが、地域づくりは逆ですよ。そこにいる人たちでできることがこんなのだと、これを組み合わせてできた形がこんなになっちゃいましたけれども、でも、本人たちはこれでもいいよねと。こっちのほうがきらびやかできれいですよね、真っ四角だからきれいだけれども、実際はそうはいかんと。しかも無償でやっているわけですから、本人たち同士がつながって楽しいということを経験しながら、地域づくりをしていかなければいけないので、国がつくっていいこうと思う計画とか、外部からの専門家の頭がこうなっていると、こういうふうにしてねという指示・命令系統のように思われてしまうという計画論の問題点を、計画書としてとりまとめるんだけど、地域の実態はこっちで進めてねと言うために、どうしたらええんやろというのに答えはないんです。答えはないんだけど、我々はこっちばかり手伝っていますので、これをまとめる方法が地元へ行くとこっちになっているというやり方は、この変換が何で行われるのか、ここに興味があります。油断するとこれの小さいやつが市町村に行くんです。霞が関でこういう方法で考えて、こういうやり方だよと書いた図がそのまま市町村に行って、市町村も住民にさも命令するかのよう、あるいは外注するかのよう、甲と乙の関係のようになんか完成させようと思ってしまうんですけど、今、この国土で必要なのは右側の進め方だとすると、計画論は一体どうあるべきなのかというのがすごく問われているなという気がしました。今日皆さんのお話をお聞きして、僕に答えはありませんけれども、ここの変換が何かうまく行われるといいなと感じました。

以上です。

【小田切委員長】 ありがとうございます。最後のお話も非常に含蓄深いお話をいただきました。

もう時間になっておりますので、ここで委員会を閉じてみたいと思いますが、大変活発な議論ができました。何よりも山崎代表、わざわざお越しいただき、本当にありがとうございました。御礼を申し上げます。

それでは、事務局にお返ししたいと思います。

【水谷課長補佐】      ありがとうございました。

では、次回、第14回の住み続けられる国土専門委員会は最終回となりますが、4月19日金曜日を予定しております。詳細については追ってご連絡させていただきます。

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

— 了 —